

# 敬語の指針（たたき台）

平成18年11月〇〇日

文化審議会国語分科会報告案

# 敬語の指針

## 目 次

はじめに .....	1
第1章 敬語についての考え方	
第1 基本的な認識	
1 敬語の重要性.....	3
2 「相互尊重」という敬語の基盤.....	4
3 「自己表現」としての敬語使用.....	4
第2 留意すべき事項	
1 地域方言の中の敬語の多様性.....	6
2 世代や性による敬語意識の多様性.....	6
3 いわゆる「マニュアル敬語」.....	7
4 情報化社会における敬語の在り方.....	8
5 敬語についての教育.....	9
第2章 敬語の仕組み	
第1 敬語の種類と働き	
1 尊敬語（「いらっしゃる・おっしゃる」型）.....	10
2 謙讓語Ⅰ（「伺う・申し上げる」型）.....	11
3 謙讓語Ⅱ（丁寧語）（「参る・申す」型）.....	14
4 丁寧語（「です・ます」型）.....	16
5 美化語（「お酒・お料理」型）.....	17
6 尊敬語・謙讓語Ⅰの働きに関する留意点.....	17
付 これまでの三分法との関係.....	20
第2 敬語の形	
1 尊敬語.....	21
2 謙讓語Ⅰ.....	23
3 謙讓語Ⅱ（丁寧語）.....	25
4 丁寧語.....	25
5 美化語.....	26
6 二つ以上の種類の敬語にわたる問題.....	26
付 敬語との関連で注意すべき助詞の問題.....	29

### 第3章 敬語の具体的な使い方

#### 第1 敬語を使うときの基本的な考え方

- 1 現代の敬語は、相互尊重を基本として使う…………… 30
- 2 敬語は社会的な立場を尊重して使う…………… 30
- 3 敬語は「自己表現」として使う…………… 31
- 4 敬語は過剰でなく適度に使う…………… 31
- 5 敬語は自分の気持ちにふさわしいものを選んで使う…………… 32

#### 第2 敬語の適切な選び方

- 1 尊敬語にするための形の問題…………… 33
- 2 尊敬語と謙讓語Ⅰの混同の問題…………… 34
- 3 謙讓語Ⅱ(丁重語)に関する形の問題…………… 35
- 4 自分側に「お・御」を付ける問題…………… 35
- 5 「いただく」と「くださる」の使い方の問題…………… 36
- 6 「させていただく」の使い方の問題…………… 36

#### 第3 具体的な場面での敬語の使い方

- 1 自分や相手の呼び方の問題…………… 37
- 2 「ウチ・ソト」の関係における問題…………… 39
- 3 「ねぎらい」と「褒め」の問題…………… 41
- 4 能力などを直接尋ねることの問題…………… 43
- 5 依頼の仕方の問題…………… 44
- 6 いわゆる「マニュアル敬語」の問題…………… 45
- 7 敬語使用における地域差の問題…………… 46

終わりに…………… 48

#### (参考資料)

- 文化審議会国語分科会委員名簿……………
- 文部科学大臣諮問(平成17年3月30日)……………
- 文部科学大臣諮問理由説明……………
- 審議経過……………

## はじめに

### <検討の経緯・報告案の目的>

平成17年3月30日に、文部科学大臣から文化審議会に対し、「敬語に関する具体的な指針の作成について」及び「情報化時代に対応する漢字政策の在り方について」が諮問され、文化審議会国語分科会（以下、「分科会」という。）において検討することとされた。

分科会では、平成17年5月16日に開催された第29回分科会総会以降、平成18年10月23日の第33回分科会総会まで、継続して上記の諮問事項の検討を行ってきた。この間、平成17年7月5日の第30回分科会総会では、この二つの諮問事項に対応するために、分科会の中に、敬語小委員会及び漢字小委員会の二つの委員会を設置することを決め、「敬語に関する具体的な指針の作成について」は、敬語小委員会で担当することが確認された。

敬語小委員会では、慎重に審議を進めつつ、更に検討を深めるために、敬語小委員会の下に「敬語小委員会ワーキンググループ」を設置して、敬語の専門家を中心に精力的かつ周到な審議を重ねてきた。ここまでの敬語小委員会及び敬語小委員会ワーキンググループの開催回数は計32回に上る。

本報告案は、上述の審議の結果をまとめたものである。今後、「敬語に関する具体的な指針の作成について」を受けた答申をまとめていくことが予定されているが、報告案は、その答申の作成に向けて、様々な立場や分野の方たちからの御意見をいただくことを目的として、広く公開するものである。

### <従来 of 建議・答申との関連>

国語分科会の前身に当たる国語審議会においては、敬語に関する審議と、建議・答申を過去2度行っている。昭和27年4月の「これからの敬語」（建議）と平成12年12月の「現代社会における敬意表現」（答申）である。

今回の敬語の審議では、これらの建議及び答申の内容を吟味して、「これからの敬語」で個別的に扱われた敬語をより全体的な視野から検討すること、また「現代社会における敬意表現」で扱われた「敬意表現」のうち敬語に焦点を絞ることを心掛け、報告案「敬語の指針」を作成するに至った。

本報告案は、直接は、平成12年の「現代社会における敬意表現」（答申）に続くものである。なお、同答申では、敬意表現について次のように定義・説明している。

敬意表現とは、コミュニケーションにおいて、相互尊重の精神に基づき、相手や場面に配慮して使い分けしている言葉遣いを意味する。それらは話し手が相手の人格や立場を尊重し、敬語や敬語以外の様々な表現から適切なものを自己表現として選択するものである。

本報告案では、敬語に関し、「相互尊重」や「自己表現」という用語と考え方によって説明したり、「相手や場面に配慮して」という趣旨の説明を用いたりしている。このことに端的に現れているとおり、本案は、敬語を用いた言語表現を敬意表現に位置付ける立場に立っている。

したがって、また「現代社会における敬意表現」(答申)において広く敬意表現について示された「言葉遣いをめぐる課題」「敬意表現についての留意点」の中には、本報告案の焦点とした「敬語」に直接該当する記述が多い。報告案では、同答申との重複を避けるため、そのすべてには言及していない。

#### <報告案の構成>

報告案としての「敬語の指針」は、「第1章 敬語についての考え方」、「第2章 敬語の仕組み」「第3章 敬語の具体的な使い方」の3章から成る。

報告案は、敬語がコミュニケーションを円滑に行い、確かな人間関係を築いていくために欠かせないものであるという基本的な立場に立つ。その上で、「敬語が必要だと感じているけれども、現実の運用に際しては困難を感じている人たち(文部科学大臣諮問理由)」を主たる対象として、敬語についての基本的な考え方(第1章)、敬語の種類・働き・形(第2章)、具体的な場面における敬語の適切な使い方(第3章)を記述する。

#### <「指針」としての性格>

本報告案は、敬語の内容や使い方について基本的な解説を行うとともに、疑問や議論の対象となりやすい事項について具体的に説明することによって、敬語についての指針として活用されることを意図している。学校教育や社会教育での敬語の学習や指導、あるいは地域・職場・家庭など様々な社会生活での実際の敬語使用等のためには、それぞれの分野ごとに、目的や対象に応じた敬語の「よりどころ」が具体的な教材や資料などの形で今後作成されるであろう。本報告案が、各分野で作成される上述のような「よりどころ」の基盤、すなわち<よりどころのよりどころ>として活用されることを期待する。

## 第1章 敬語についての考え方

本章においては、敬語についての基本的な考え方を述べる。あわせて、現代社会の敬語に関して特に留意すべき事項、本報告案に先立つ国語審議会答申「現代社会における敬意表現」の内容との関連についても述べる。

### 第1 基本的な認識

#### 1 敬語の重要性

敬語は、古代から現代に至る日本語の歴史の中で、一貫して重要な役割を担い続けている。その役割とは、人が言葉を用いて自らの意思や感情を人に伝える際に、単にその内容を表現するのではなく、相手や周囲の人と、自らとの人間関係・社会関係についての気持ちの在り方を表現するという役割である。気持ちの在り方とは、例えば、立場や役割の違い、年齢や経験の違いなどに基づく敬いやへりくだりなどの気持ちである。同時に、敬語は、言葉を用いるその場の状況についての人の気持ちを表現する言語表現としても、重要な役割を担っている。例えば、公的な場での改まった気持ちと、私的な場でのくつろいだ気持ちとを人は区別する。敬語はそうした気持ちを表現する役割も担う。

このように敬語は、言葉を用いる人の、相手や周囲の人やその場の状況についての気持ちを表現する言語表現として、重要な役割を果たす。

また、以上のことを別の方向から見直すと、敬語は、話し手あるいは書き手（以下、同じ意味を「話し手」で代表させる。）がその場の人間関係や状況をどのようにとらえているかを表現するものであるとも言える。例えば、「鈴木さんがいらっしゃる」という尊敬語は「鈴木さん」を立てて述べる敬語であるが、この敬語を用いることによって、話し手は、自らが「鈴木さん」を立てるべき人としてとらえていることを表現できる。また、「こちらです」という丁寧語は、「こっちだ」と同様の意味を相手に対して丁寧に述べる敬語であるが、この敬語を選ぶことによって、話し手は、相手を丁寧に述べるべき人として扱っていることを表現できる。

このように、敬語は、話し手が、相手や周囲の人と自らの間の人間関係をどのようにとらえているかを表現する働きも持つ。

留意しなければならないのは、敬語を用いれば、話し手が意図するか否かにかかわらず、その敬語の表現する人間関係が表現されることになり、逆に、敬語を用いなければ、用いたときは異なる人間関係が表現されることになるということである。敬語をどのように用いるとどのような人間関係が表現されるかについて留意することはもとより必要であるが、それと同時に、敬語を用いないとどのような人間関係が表現されるかについても十分に留意することが必要である。

言語コミュニケーションは、話し言葉であれ書き言葉であれ、いつも具体的な場で人と人との間で行われる。そして、敬語は人と人との間の関係を表現する（注意深く言えば、意図するか否かにかかわらず表現してしまう。）ものである。そうであるからには、社会生活や人間関係の多様化が深まる日本語社会において、人と人がコミュニケーションを円滑に行い、確かな人間関係を築いていくために、現在も、また将来にわたっても、敬語の重要性は変わらないと認識することが必要である。

ちなみに、平成16年に文化庁が実施した「国語に関する世論調査」において、「今後とも敬語は必要である」という意見が回答者全体の96.1%によって支持されている。国民一般の間で、敬語の重要性が将来に向けても強く認識されている。

## 2 「相互尊重」という敬語の基盤

敬語は、人と人との相互尊重の気持ちを基盤とすべきものである。

言葉は時代とともに変化する。敬語も、社会や人間関係の在り方、言語を用いる場についての人の考え方そのものが時代を追って変化するのに応じて、その形や意味を変化させて現代に至っている。身分や役割の強固で固定的な階層を基盤としたかつての社会にあっては、敬語も階層や人ごとに固定的で絶対的な枠組みで用いられた。

これに対して、現代社会は、基本的に平等な人格を互いに認め合う社会である。敬語も固定的・絶対的なものとしてではなく、人と人との相互に尊重し合う人間関係を反映した相互的・相対的なものとして定着してきている。前に例示した「敬い」「へりくだり」という敬語の意味合いも、身分などに基づく旧来の固定的なものでなく、相互尊重の気持ちを基盤として、その都度の人間関係に応じたものに変化していると理解すべきである。

この「相互尊重」という敬語の基盤は、既に昭和27年の国語審議会建議「これからの敬語」の「基本の方針」の条において「これからの敬語は、各人の基本的人格を尊重する相互尊敬の上に立たなければならない。」と将来に向けて示されたところと共通する。さらに、時を経て平成12年の「現代社会における敬意表現」において、「敬意表現とは、コミュニケーションにおいて、相互尊重の精神に基づき、相手や場面に配慮して使い分けられている言葉遣いを意味する。」として、そのような基本認識が定着していることを含意して記述されたところとも共通する。今回の報告案においても、将来にわたって敬語が相互尊重の気持ちを基盤とされるべきものであることを、改めて明示しておく。

## 3 「自己表現」としての敬語使用

敬語は、その場の人間関係や場の状況に対する気持ちの在り方を表現すると「1 敬語の重要性」で述べた。そして、例えば、敬いやへりくだりという気持ちは、現代の敬語においては人や階層ごとに固定的・絶対的なものでなく、相互尊重を基盤とした相互的・相対的なものであることを上の「2 「相互尊重」という敬語の基盤」で述べた。これらのことは、敬語の使い方が、「こういう相手には、いつも、だれでも、この敬語でなくてはならない。」とか「こういう場面では、いつも、皆がこの敬語を使わなくてはならない。」というように、敬語の使用を固定的に考えるのは、適切でないという考え方につながる。報告案は、この考え方を基本とした上で、敬語の使い方について、次の二つの事柄を指針の基盤として提示する。

一つは、敬語の使用は、飽くまでも「自己表現」であるべきだという点である。「自己表現」とは、具体的な言語表現に際して、相手や周囲の人との人間関係やその場の状況に対する自らの気持ちの在り方を踏まえて、その都度、敬語を含めた言葉遣いに主体的な選択や判断をして表現するということである。この「自己表現」という考え方は、「現代社会における敬意表現」にも示されている。

例えば、敬語使用に関連して、「心からは尊敬できない人にも敬語を使わなくてはならないか。」とか「相手によっては敬語を使うとよそよそしくなる気持ちがする。それでも敬語はいつも使わなくてはならないか。」といった疑問を聞くことがある。それぞれ、固定的な敬語や言葉遣いについての疑問である。本報告案では、そのような固定的な考え方は選ばないこと、そして、その都度の人間関係や場の状況についての自らの気持ちに即した、より適切な言葉遣いを主体的に選んだ「自己表現」を実現することを目指したい。この場合も、前述の「相互尊重」の姿勢を基盤とすべきであることはもちろんである。

二つ目は、そうした「自己表現」として敬語使用をする際にも、敬語の間違い、不足、使い過ぎは避けるべきであるということである。言うまでもないことながら、それを十全に行うために、敬語や敬語の使い方についての知識や考え方を身に付けることが必要となる。例えば、「今の自分のこの気持ちを表現するためには、どんな敬語が適切か。」「こういう敬語を使うと、人間関係や場面について、どんな気持ちが表現できるか。」、さらには前に述べたように「この敬語を使うと（あるいは、この敬語を使わないと）どのような気持ちが表現されることになるか。」と、自らに問い掛ける姿勢が必要となろう。これらの問いは、前に挙げた固定的な敬語使用を問うものとは異なり、「自己表現」として敬語を主体的に選ぶ際の問いである。そのような努力は惜しむべきでない。報告案では第2章、第3章に、そのための「よりどころ」を示すので、参考にさせていただきたい。



## 第2 留意すべき事項

### 1 地域方言の中の敬語の多様性

国内各地には、それぞれ固有の方言がある。そして、多くの方言には、それぞれ独特の敬語がある。

例えば、関西地方を中心とする西日本では「～はる・～やる」など、全国共通語の「～れる・～られる」と似た意味の尊敬語が広く用いられる。これらは、例えば「うちの父さん、家にいてはります。」「庭のお花、きれいに咲いてはりますねえ。」というように、全国共通語の「～れる・～られる」がふつう使われない場合、つまり自分側の人物の行為や身近な自然の事物を立てて述べる場合にも用いられる。

この例のように、方言の敬語は、全国共通語の敬語とは異なる場合が多く、それらは、言語表現の形や意味の上での多様性だけでなく、それらの使い方の上での多様性も持っている。方言のこうした多様な敬語は、方言一般と同様、その地域に昔から定着したものであり、そこでの言語生活に欠くことのできない、多様で豊かな言語表現を作り上げる。

また一方では、全国共通語の尊敬語・謙譲語等に当たる言語形式を備えず、敬語が希薄だとされる地域もある。例えば、東北地方南部や関東地方北部などである。しかし、この地域においても、例えば「そだなし・そだのう」などの文末表現やそれらの抑揚（イントネーション）が、相手への丁寧な気持ちや改まった気持ち（全国共通語の「そうですねえ・そうですね」のような意味）を表す言語表現として用いられる。敬意表現の一つの姿である。

本報告案の第2章、第3章では、全国共通語の敬語を中心に述べることになる。しかし、以上に述べたような方言の敬語の存在、それらの形や使い方の多様性は、それぞれの地域社会の日常の言語生活を豊かなものにする上で、欠かせない重要な働きをしている。全国共通語の敬語と並ぶものとして、将来にわたって大切にしていける必要がある。

### 2 世代や性による敬語意識の多様性

言葉遣いや言葉についての考え方は、世代によって、あるいは性によって異なる場合が少なくない。敬語の使い方や敬語についての考え方もその例外ではない。

例えば、「植木に水をあげる」と言うか「植木に水をやる」と言うかについて、文化庁「国語に関する世論調査」（平成18年2月調査）においては、「あげる」と言う男性回答者の割合は、10代・20代では30～40%台であるのに対して、50代・60代以上では5～10%台であって世代による違いが見られる。同じ質問について女性回答者は、多くの世代において「あげる」と答えた人の割合が男性より高いが、同時に男性と同様の世代差も見られる。また「ふだん「弁当」という言葉に「お」を付けるかどうか」について、「お弁当」と言うと回答した人の割合は、すべての世代を通じて、男性は10～30%台にとどまるのに対して、女性はすべての世代で約70～80%台の高い割合である。

こうした敬語の使い方についての世代や性による違いに関して、本報告案は以下の2点を指摘する。

一つは、敬語の使い方の違いには、その敬語について理解や認識の違いが反映している

ことを考慮すべきだということである。例えば、「やる」を適切な言葉として選ぶ人は、「あげる」に謙譲語的な旧来の意味を認め、「植木」はその種の言葉を用いるべき対象物ではないと考えている可能性がある。一方、「あげる」を使うと答える人は、この語の謙譲語的な意味が既に薄れていると考え、同時に「やる」という語に卑俗さ・ぞんざいさを感じてこれを避けている可能性がある。現代は、この二つの考え方が言わば拮抗している時代であろう。「植木に水をあげる」という場合の「あげる」は、旧来の規範からすれば誤用とされるものであるが、この語の謙譲語から美化語に向かう意味的な変化は既に進行し、定着しつつあると言ってよい。

敬語の使い方や意見の異なりを考える際、例えば「あげる」と「やる」についての理解や認識にこうした違いがあるように、それぞれの使い方や意見のよりどころとなっている別の理解や認識があること、つまり、自分自身とは異なる感じ方や意見を持つ人が周囲にいることに留意する必要がある。

今一つ、より重要なこととして、前章で示した「自己表現」という観点から言葉遣いを自ら選ぶ姿勢を持つこと、同時に、他者の異なる言葉遣いも、その人の「自己表現」として受け止める姿勢を持つことに留意したい。「植木」をいつくしみ育てる気持ちは、「あげる」「やる」のいずれによっても表現される。別の例とした「お弁当」の「お」を添えるか添えないかについても、話し相手に向けて自らの言葉遣いをどのように整えたいかという気持ちから、「自己表現」として選ばれる。このように、敬語を選んで使おうとする際に、それを画一的に規制するような男女の違いや世代などの枠組みが入り込む余地は本来ないと考えることが必要である。

以上のように、世代や性によって敬語の使い方や考え方に違いがあることについては、一つ一つの言葉遣いを敬語使用の現状や現代の規範に照らして、吟味しながら受け止める姿勢が必要である。同時に、敬語を、世代や性による画一的な枠組みによるのではなく、「自己表現」として選ぶという姿勢や工夫も必要である。

### 3 いわゆる「マニュアル敬語」

敬語について議論される中で、いわゆる「マニュアル敬語」がしばしば批判的に取り上げられる。職場での言語使用、特に接客の場面での言語使用について、具体的な言語表現などを示すマニュアルの中での敬語の示し方、更にそのマニュアルに過度なまでに従った敬語使用への批判である。

本報告案は、このことについて、以下の2点を指摘する。

一つは、マニュアルというものの自体は、敬語にまだ習熟していない人、特にその職場などに特有の言語場面での敬語にまだ不慣れな人のために、敬語の形や具体的な場面ごとの敬語の使い方を実践的な内容で示すものとして有効だということである。敬語の使い方には、相手や場に応じた幾つかの典型例や型があり、職場などごとに用意されるマニュアルは、そうした典型例や型を示すことによって、まだ習熟していない人への手引として有効なものとなり得る。その意味で、マニュアルは、今後とも、それぞれの分野や職場で適切な内容で作成されることが必要となろう。

二つ目に、しかしながら、マニュアルに示す敬語が過度に丁寧であったり、実際の接客場面での言葉遣いにマニュアルが過度の制約になったりすることは避ける必要がある。い

つでも、どんな相手にでも、マニュアルに示された言葉だけを画一的に使うことは、相手、例えば顧客にかえって不快な思いを与えたり、その場にそぐわない過不足のある敬語使用になったりすることにつながる。

この点については、マニュアルによって敬語の使い方を指導する場合にも、また敬語の使い方をマニュアルから習得する場合にも、マニュアルの内容を絶対唯一のものとして扱うことを避ける態度が必要である。マニュアルに掲げたもの以外の言語表現を用いることを許さないような指導や規制、あるいは、いつでも、どんな相手にでもマニュアルに示された言語表現だけで事は足りるとするような受け止め方、これらはどちらも、本報告案の目指す「自己表現」という敬語使用の基本姿勢とは正反対のものである。

敬語の使い方、職場などに特有の言語表現などにまだ習熟していない人のために、場面に即した敬語の使用例などを具体的に示すことがマニュアルには欠かせない。そうした具体例を示す際には、「自己表現」として選ぶべき多様な敬語や言語表現を示し、その習得や実践を動機付けるような内容を期待したい。例えば、一つの場面について、相手や状況に応じた複数の言語表現を例示したマニュアル、そうした複数の表現例の中から最適と思われるものを選ぶ際の考え方を示すマニュアル、あるいはマニュアルに示した言葉遣いに加えて、その場にふさわしい別の敬語や言語表現を工夫することを求めるマニュアルなどが考えられよう。

#### 4 情報化社会における敬語の在り方

高度情報化の展開に伴って、職場の公的な場だけでなく家庭や地域の私的な場においても、ファクシミリ、パーソナルコンピューターや携帯電話の電子メール、インターネットによる情報通信などの新しいコミュニケーション媒体が普及した。それに伴って、こうした媒体を用いて伝える言語表現の中の敬語使用について、問題が指摘されたり、あるべき姿が提案されたりしている。例えば、同じ相手に向けて、直接話す場合や手紙・文書を書く場合と比べて、ファクシミリや電子メールでは文章自体を要点だけの短いものにすると同時に、敬語も割愛してしまうといった傾向への批判や注意喚起である。

言うまでもなく、ファクシミリや電子メールも相手のあるコミュニケーション媒体である。そこで用いる言語表現には、他の媒体による場合と同様、相手や状況に対するふさわしい気配りが不可欠である。この基本は変わらずに堅持したい。

その際、手紙や文書の言葉遣い、その中の敬語使用に、同じ相手へのものであっても直接に話して伝える場合とは異なる場合があること、あて名の敬称、冒頭の書き起こし、末尾の結語などを含めて文章全体の形式や言葉遣いに型というべきものを想起したい。これらは、手紙や文書の長い歴史の中で模索され、変化しつつ定着したものである。

ここで問題としているファクシミリや電子メールは、広く利用されるようになってまだ日が浅い媒体である。これらの新しい伝達媒体にふさわしい言語表現や敬語使用を工夫し提案する努力は既に始まっているが、今後は、社会の各方面で、それぞれの目的や状況に即した工夫や提案が実現することを期待する。繰り返すことになるが、新しい伝達媒体にふさわしい言語表現や型においても、敬語の基本となるべき「相互尊重」や「自己表現」の原則を基盤とすべきことはもちろんである。

## 5 敬語についての教育

人が社会生活において敬語を活用できるようになる過程で、学校教育や社会教育での学習と指導は重要な役割を果たす。日常生活で周囲の人が実際に敬語を用いるところを見聞きすることによって、実際場面に即して敬語を身に付けることと同様に、能動的・意図的な学習や教育の機会も不可欠である。

現在の初等・中等の学校教育では、学校段階や学年段階に応じて、例えば「ていねいな言葉とふつうの言葉」や「敬体と常体」という2分類、あるいは尊敬語・謙譲語・丁寧語の3分類、これに美化語を加えた4分類などの枠組みによって、敬語の種類や仕組みを学習・指導している。こうした敬語の基礎的な知識は、日常生活で見聞きして習得していく実践的な敬語使用と異なり、学校教育での体系的な学習によって、より効果的に習得できるものと考えられる。その意味で、学校教育での敬語の学習・指導は、今後とも継続していく必要がある。例えば、敬語の基本についての知識を国語科において扱うと同時に、敬語の実践的な使用についての学習・指導を、様々な人間関係や多様なコミュニケーションの場が体験できる総合的な学習の時間や生徒会・児童会・クラブ活動などの校内活動の機会を活用して行うなど、従来も蓄積された工夫を一層充実させることが課題となろう。

なお、本報告案の第2章では、敬語を5種類に区別する枠組みで説明する。これは、これまでの学校教育等で行われた前述の3分類ないし4分類のうち、謙譲語と一括されてきた語群だけについて、それらの敬語としての性格をよりはっきりと理解するために必要な区分けをしたものである。したがって、この5分類は、従来の学校教育等において3～4分類の枠組みで行われている敬語の学習や指導と対立するものではない。学校段階や学年段階あるいは学習者の習熟度等に応じて、例えば、小学校においては3分類による指導を行い、中学校・高等学校ではそれを基本としながら、5分類の枠組みで謙譲語の内部区分に言及するといった、段階的な指導も考えられる。このことは、社会教育における敬語の扱いや、敬語関係の参考書等の作成においても望まれる配慮である。

## 第2章 敬語の仕組み

敬語を適切に使うためには、敬語の種類やその仕組み（各種の敬語はどのような形をしていて、どのように働くのか、使う場合の留意点はどのようなことか、など）についての体系的な知識が必要である。本章では、それらの要点を「敬語の種類と働き」及び「敬語の形」に分けて述べる。

### 第1 敬語の種類と働き

敬語は、次の5種類に分けて考えることができる。

- (1) 尊敬語                   (「いらっしゃる・おっしゃる」型)
- (2) 謙譲語Ⅰ               (「伺う・申し上げる」型)
- (3) 謙譲語Ⅱ(丁寧語)   (「参る・申す」型)
- (4) 丁寧語                  (「です・ます」型)
- (5) 美化語                  (「お酒・お料理」型)

それぞれの働きは、次のとおりである。

#### 1 尊敬語(「いらっしゃる・おっしゃる」型)

相手側又は第三者の行為・ものごと・状態などについて、その人物を立てて述べるもの。

##### [該当語例]

##### [行為等(動詞、及び動作性の名詞)]

いらっしゃる、おっしゃる、なさる、召し上がる  
お使いになる、御利用になる、読まれる、始められる  
お導き、御出席、(立てるべき人物からの)御説明

##### [ものごと等(名詞)]

お名前、御住所、(立てるべき人物からの)お手紙

##### [状態等(形容詞など)]

お忙しい、御立派

#### [解説1：行為についての尊敬語]

「先生は来週海外へいらっしゃるんですね。」と述べる場合、「先生は来週海外へ行くんですね。」と同じ内容であるが、「行く」の代わりに「いらっしゃる」を使うことで、「先生」を立てる述べ方になる。このように、「いらっしゃる」は<行為者>

に対する敬語として働く。この種の敬語は、一般に「尊敬語」と呼ばれている。「先生のお導き」なども、＜行為者＞を立てる尊敬語である。

(注) 「いらっしゃる」には、「行く」意味のほかに「来る」「いる」意味の用法もある。これらの「いらっしゃる」も尊敬語である。

#### [解説2：ものごとや状態についての尊敬語]

「お名前」「お忙しい」のように、行為ではなく、ものごとや状態を表す語にも、尊敬語と呼ばれるものがある。例えば「先生のお名前」は「名前」の＜所有者＞である「先生」を、また「先生はお忙しいようですね。」は「忙しい」状態にある「先生」を、それぞれ立てることになる。

#### [解説3：立てられる人物について]

「先生は来週海外へいらっしゃるんですね。」(あるいは「先生のお名前」など)と述べる場合には、次のような各場合がある。

①「先生」に対して、直接このように述べる場合

②「先生」の家族等に対して、このように述べる場合

③その他の人(例えば友人等)に対して、このように述べる場合

尊敬語を使うことによって立てられる人物(上記の例の「先生」)は、①の場合は「話や文章の相手」、②の場合は「相手の側の人物」に当たる(①②の場合をまとめて「相手側」と呼んでおく)。また、③の場合は「第三者」に当たる。以上のように、尊敬語は「相手側又は第三者」の行為・ものごと・状態などについての敬語である。

なお、立てられる人物(上記の例なら「先生」)が状況や文脈から明らかな場合には、それを言葉で表現せずに、ただ「来週海外へいらっしゃるんですね。」「お名前」などと述べる場合もある。

#### [補足：「くださる」]

「くださる」の場合は、行為者を立てるという一般の尊敬語の働きに加えて、「その行為者から恩恵が与えられる」という意味も併せて表す。例えば、「先生が指導してください。」「先生が御指導くださる。」は、それ(＝「先生が指導すること」)が有り難いことである、という表現の仕方になる。

## 2 謙譲語Ⅰ(「伺う・申し上げる」型)

自分側から相手側又は第三者に向かう行為・ものごとなどについて、その向かう先の人物を立てて述べるもの。

#### [該当語例]

伺う、申し上げる、お目に掛かる、差し上げる

お届けする、御案内する

(立てるべき人物への)お手紙、御説明

### [解説1：行為についての謙譲語Ⅰ]

「先生のところに伺いたいんですが……。」と述べる場合、「先生のところに行きたいんですが（先生のところを訪ねたいんですが）……。」と同じ内容であるが、「行く（訪ねる）」の代わりに「伺う」を使うことで、「先生」を立てる述べ方になる。このように、「伺う」は＜向かう先＞に対する敬語として働く。この種の敬語は、一般に「謙譲語」と呼ばれてきたが、ここでは3の「謙譲語Ⅱ」と区別して、特に「謙譲語Ⅰ」と呼ぶこととする。

(注)。「伺う」には、「行く（訪ねる）」意味のほか「聞く」「尋ねる」意味の用法もある。これらの「伺う」も謙譲語である。

### [解説2：＜向かう先＞について]

例えば「先生にお届けする」「先生を御案内する」などの「先生」は＜向かう先＞であるが、このほか「先生の荷物を持つ」「先生のために皿に料理を取る」という意味で「お持ちする」「お取りする」と述べるような場合の「先生」についても、ここでいう＜向かう先＞である。(例、「あ、先生、そのかばん、私がお持ちします。」「先生、お料理、お取りしましょう。」)

また、「先生からお借りする」の場合は、「先生」は、物の移動の向きについて見れば＜向かう先＞ではなく、むしろ「出どころ」であるが、「借りる」という行為について見れば、「借りる」という行為が＜向かう先＞だと見ることができる。「先生からいただく」「先生に指導していただく」の場合の「先生」も、物や「指導する」という行為について見れば、「出どころ」や「行為者」ではあるが、「もらう」「指導を受ける」という側から見れば、その＜向かう先＞である。その意味で、これらも謙譲語Ⅰであるということになる。

上で述べた＜向かう先＞とは、このような意味である。

### [解説3：名詞の謙譲語Ⅰ]

「先生へのお手紙」「先生への御説明」のように、名詞についても、＜向かう先＞を立てる謙譲語Ⅰがある。

(注)ただし、「先生からのお手紙」「先生からの御説明」の場合は、＜行為者＞を立てる尊敬語である。このように、同じ形で、尊敬語としても謙譲語Ⅰとしても使われるものがある。

### [解説4：立てられる人物について]

「先生のところに伺いたいんですが……。」（あるいは「先生への御説明」）などと述べる場合には、次のような各場合がある。

- ①「先生」に対して、直接このように述べる場合
- ②「先生」の家族等に対して、このように述べる場合
- ③その他の人（例えば友人等）に対して、このように述べる場合

謙譲語Ⅰを使うことによって立てられる＜向かう先＞の人物（上記の例の「先生」）は、①の場合は「話や文章の相手」、②の場合は「相手の側の人物」に当たる（①②の場合をまとめて「相手側」と呼ぶ）。また、③の場合は「第三者」に当たる。以上

のように、謙譲語Ⅰは、「相手側又は第三者」を<向かう先>とする行為・ものごとなどについての敬語である。

なお、立てられる人物（上記の例なら「先生」）が状況や文脈から明らかな場合には、それを言葉で表現せずに、ただ「伺いたいんですが……。」「御説明」「お手紙」などと述べる場合もある。

#### [解説5：行為者について]

謙譲語Ⅰの行為者については、次の①又は②のような使い方が一般的である。

①「先生のところに伺いたいんですが……。」のように、「自分」の行為について使う。

②「息子が先生のところに伺いまして……。」のように、「自分の側の人物」の行為について使う。

このように、謙譲語Ⅰは、一般的には、「自分側」（①②の場合をまとめてこう呼んでおく。）から「相手側又は第三者」に向かう行為について使う。

ただし、謙譲語Ⅰは、このほか、次のように使う場合もある。

③「田中くんが先生のところに伺ったそうですね。」のように、「第三者」の行為について使う。

④「鈴木くんは先生のところに伺ったことがありますか。」（「鈴木くん」に対して、あるいは「鈴木くん」の家族等に対してこう述べる）のように、「相手側」の行為について使う。

③④は、「自分側」からの行為ではない点は①②と異なるが、<向かう先>の「先生」を立てる働きを果たしている点は①②と同様である。また、③④では、行為者の「田中くん」「鈴木くん」は、<向かう先>の「先生」に比べれば、この文脈では「立てなくても失礼に当たらない人物」ととらえられている（例えば、③④の文を述べている人と「田中さん」や「鈴木さん」が、共に「先生」の指導を受けた間柄である場合など）。

このように、相手側や第三者の行為であっても、その行為の<向かう先>が「立てるべき人物」であって、かつ行為者が<向かう先>に比べれば「立てなくても失礼に当たらない人物」である、という条件を満たす場合に限っては、謙譲語Ⅰを使うことができる。

#### [補足：「いただく」]

「いただく」は、上に述べたとおり、謙譲語Ⅰであるが、謙譲語Ⅰの基本的な働きに加えて、恩恵を受けるという意味も併せて表す。例えば、「先生に指導していただく。」「先生に御指導いただく。」は、それが有り難いことである、という表現の仕方になる。



### 3 謙讓語Ⅱ（丁重語）（「参る・申す」型）

自分側の行為・ものごとなどを、話や文章の相手に対して丁重に述べるもの。

#### 〔該当語例〕

参る，申す，いたす，おる  
拙著，小社

#### 〔解説1：謙讓語Ⅱとその典型的な用法〕

「明日から海外へ参ります。」と述べる場合、「明日から海外へ行きます。」と同じ内容であるが、「行く」の代わりに「参る」を使うことで、自分の行為を、話や文章の相手に対して改まった述べ方で述べることになり、これが、丁重さをもたらすことになる。このように、「参る」は<相手>に対する敬語として働く。

この種の敬語は、一般に「謙讓語」と呼ばれてきたが、ここでは、2の「謙讓語Ⅰ」と区別して、特に「謙讓語Ⅱ（丁重語）」と呼ぶこととする。

（注）「参る」には、「行く」意味のほか「来る」意味の用法もある。この意味の「参る」も謙讓語Ⅱである。

#### 〔解説2：名詞の謙讓語Ⅱ〕

「拙著」「小社」など、名詞についても、自分に関することを控え目に表す語があり、これらは、名詞の謙讓語Ⅱだと位置付けることができる。ただし、主に書き言葉で使われる。

#### 〔解説3：「バスが参りました」— 自分側の行為以外にも謙讓語Ⅱを使う場合 — 〕

謙讓語Ⅱのうち、行為を表すもの（動詞）は、次の①又は②のように使うのが典型的な使い方である。

①「私は明日から海外に参ります。」のように、「自分」について使う。

②「息子は明日から海外に参ります。」のように、「自分の側の人物」について使う。

このように、謙讓語Ⅱは、基本的には、「自分側」（①②の場合をまとめてこう呼んでおく。）の行為に使う。

ただし、謙讓語Ⅱは、このほか、次のように使う場合もある。

③「向こうから子供たちが大勢参りました。」「あ、バスが参りました。」「夜も更けてまいりました。」のように、「第三者」や「事物」について使う。

③では、「自分側」の行為ではない点は、①②と異なるが、「話や文章の相手に対して丁重に述べる」という働きを果たしている点は、①②と同様である。③の初めの例の「子供たち」は、この文脈では「立てなくても失礼に当たらない人物」ととらえられている。このように、立てなくても失礼に当たらない第三者や事物についても、謙讓語Ⅱを使うことができる。

なお、謙讓語Ⅱは、基本的には「自分側」の行為に使うものなので、「相手側」の行為や「立てるべき人物」の行為について、「（あなたは）どちらから参りましたか。」

「先生は来週海外へ参ります。」などと使うのは、不適切である。

## [補足ア：謙譲語Ⅰと謙譲語Ⅱとの違い]

— <向かう先> に対する敬語と、<相手>に対する敬語 — ]

2の「謙譲語Ⅰ」と3の「謙譲語Ⅱ」は、類似している点もあるため、どちらも、これまで「謙譲語」と呼ばれてきたが、謙譲語Ⅰは<向かう先>に対する敬語、謙譲語Ⅱは<相手>に対する敬語であり、性質が異なる。この点に関して、次のような違いもある。

### [ア-1：立てるのにふさわしい<向かう先>の有無についての違い]

謙譲語Ⅰの場合、例えば「先生のところに伺います。」とは言えるが、「海外に伺います。」は不自然である。これは、初めの例では<向かう先>である「先生」が「立てるのにふさわしい」対象となるのに対し、後の例の「海外」は「立てるのにふさわしい」対象とはならないためである。謙譲語Ⅰは、<向かう先>に対する敬語であるため、このように立てるのにふさわしい<向かう先>がある場合に限りて使う。

一方、謙譲語Ⅱの場合は、例えば「先生のところに参ります。」とも言えるし、「海外に参ります。」とも言える。謙譲語Ⅱは、<相手>に対する敬語であるため、このように立てるのにふさわしい<向かう先>の有無にかかわらず使うことができるのである。

### [ア-2：どちらも使える場合の、敬語としての働きの違い]

ふさわしい<向かう先>がある場合は、謙譲語Ⅰを使って「先生のところに伺います。」のように述べることも、謙譲語Ⅱを使って「先生のところに参ります。」のように述べることもできる。

ただし、前者が「先生」に対する敬語であるのに対して、後者は話や文章の<相手>に対する敬語であることに注意したい。つまり、「先生」以外の人に対してこれらの文を述べる場合、「先生のところに参ります。」の方は、「先生」ではなく、<相手>に対する敬語として働くことになる。(なお、「先生」に対してこれらの文を述べる場合には、「先生」=<相手>なので、結果としてどちらの文も同じように働くことになる。)

### [ア-3：「ます」との関係についての違い]

謙譲語Ⅰは、「ます」を伴わずに使うこともできる。例えば「来週先生のところに伺う(よ)。」などと、「先生」以外の人に述べることがある。

一方、謙譲語Ⅱは、一般に「ます」を伴って使う。例えば「来週海外に参る(よ)。」などと述べるのは、不自然である。

以上 [ア-1] [ア-2] [ア-3] のような謙譲語Ⅰと謙譲語Ⅱの違いは、要するに、謙譲語Ⅰは<向かう先>に対する敬語、謙譲語Ⅱは<相手>に対する敬語であるという性質の違いに基づくものである。

このような違いがあるため、ここでは、両者を区別して、一方を「謙譲語Ⅰ」、他方を「謙譲語Ⅱ」と呼ぶことにしたものである。

[補足イ：謙譲語Ⅰと謙譲語Ⅱの両方の性質を併せ持つ敬語]

謙譲語Ⅰと謙譲語Ⅱとは、上述のように異なるタイプの敬語であるが、その一方で、両方の性質を併せ持つ敬語として「お(ご)……いたす」がある。

「駅で先生をお待ちいたします。」と述べる場合、「駅で先生を待ちます。」と同じ内容であるが、「待つ」の代わりに「お待ちいたす」が使われている。これは、「お待ちする」の「する」を更に「いたす」に代えたものであり、「お待ちする」(謙譲語Ⅰ)と「いたす」(謙譲語Ⅱ)の両方が使われていることになる。この場合、「お待ちする」の働きにより、「待つ」の<向かう先>である「先生」を立てるとともに、「いたす」の働きにより、話や文章の<相手>（「先生」である場合も、他の人物である場合もある。）に対して丁重に述べることにもなる。

つまり、「お(ご)……いたす」は、「自分側から相手側又は第三者に向かう行為について、その向かう先の人物を立てるとともに、話や文章の相手に対して丁重に述べる」という働きを持つ、「謙譲語Ⅰ兼謙譲語Ⅱ」である。

4 丁寧語（「です・ます」型）

話や文章の相手に対して丁寧に述べるもの。

[該当語例]

です、ます

[解説]

「次は来月十日です。」は「次は来月十日だ。」と、また「6時に起きます。」は「6時に起きる。」と、それぞれ同じ内容であるが、「です」「ます」を文末に付け加えることで、話や文章の相手に対して丁寧さを添えて述べることになる。このように、「です」「ます」は<相手>に対する敬語として働く。この種の敬語は、一般に「丁寧語」と呼ばれている。

なお、これらと同じタイプで、更に丁寧さの度合いが高い敬語として「(で)ございます」がある。

[補足：謙譲語Ⅱと丁寧語]

3の「謙譲語Ⅱ」も話や文章の相手に対する敬語として働くので、この意味では、4の「丁寧語」と近い面を持つ。違いは、謙譲語Ⅱは基本的には「自分側」のことを述べる場合に使い、特に「相手側」や「立てるべき人物」の行為については使えないのに対し（3の[解説3]参照。）、丁寧語は「自分側」のことに限らず、広く様々な内容を述べるのに使えることである。また、謙譲語Ⅱは、丁寧語「です・ます」よりも改まった丁寧な表現である（丁寧語のうち「(で)ございます」は、謙譲語Ⅱと同程度に丁寧な表現である）。

## 5 美化語（「お酒・お料理」型）

ものごとを、美化して述べるもの。

### [該当語例]

お酒，お料理

### [解説]

例えば、「お酒」は「酒」を美化して述べるものである。「お酒は百薬の長だそうですね。」などと述べる場合の「お酒」は、1の「お導き」「お名前」（尊敬語）と違って<行為者>や<所有者>を立てるわけでも、2の「(立てるべき人物への) お手紙」（謙譲語Ⅰ）とも違って<向かう先>を立てるわけでもない。

また、3、4の謙譲語Ⅱや丁寧語とも違って、<相手>に丁寧に、あるいは丁寧に述べているということでもなく、要するに「ものごとを、美化して述べている」のだと見られる。

その意味で、前述の1～4のような狭い意味での敬語とは、性質の異なるものである。だが、<行為者><向かう先><相手>などに配慮して述べるときには、この「お酒」のような言い方が表れやすくなる（例えば、「先生は酒を召し上がりますか。」や「先生、酒をお注ぎしましょう。」の代わりに、「先生はお酒を召し上がりますか。」や「先生、お酒をお注ぎしましょう。」と述べる方がふさわしい。）、といった点で、広い意味では敬語の一種と見ることが出来るものである。この種の語は、一般に「美化語」と呼ばれている。

## 6 尊敬語・謙譲語Ⅰの働きに関する留意点

敬語のうち尊敬語と謙譲語Ⅰは、先に見たように、ある人物を「立てて」述べる敬語である。すなわち、尊敬語は「相手側又は第三者の行為・ものごと・状態などについて、その人物を立てて述べる」敬語であり、謙譲語Ⅰは「相手側又は第三者に向かう行為・ものごとなどについて、その向かう先を立てて述べる」敬語である。

実際の場面で尊敬語や謙譲語Ⅰを使って人物を「立てて」述べようとする場合に留意すべき主な点は、次のとおりである。

(1) 自分側は立てない。

(2) 相手側を立てて述べるのが、典型的な使い方である。

(3) ア 第三者については、その人物や場面などを総合的に判断して、立てる方がふさわしい場合は、立てる。

イ 自分から見れば、立てるのがふさわしいように見えても、「相手から見れば、立てる対象とは認識されないだろう。」と思われる第三者については、立てない配慮が必要である。

### 【解説1：(1)について】

(1)の「自分側」には、「自分」だけではなく、例えば「自分の家族」のように「自分にとって「ウチ」と認識すべき人物」も含めてとらえるものとする。

(1)は、例えば、他人と話す場合に「父は来週海外へいらっしゃいます。」などと述べるのは適切ではない、ということである。尊敬語「いらっしゃる」によって、自分側の「父」を立てることになるからである。「明日父のところに伺います。」と述べる場合も、謙譲語Ⅰの「伺う」が＜向かう先＞を立てる働きを持つため、やはり自分側の「父」を立てることになり、これも不適切な使い方である。

このように、「自分側は立てない」というのが、尊敬語や謙譲語Ⅰを使う場合の基本的な原則である。自分側のことについて述べる場合は、自分側を「立てる」結果になるような敬語は使わず、上記の例ならば、それぞれ、ただ「父は来週海外へ行きます。」「明日父のところに行きます。」のように述べるのが一般的な述べ方である。

ただし、自分側のことを述べるために使うふさわしい敬語（謙譲語Ⅱ）が別にある場合には、これを使うと、相手に対する丁寧な述べ方になる。上記の例ならば「父は来週海外へ参ります。」「明日父のところへ参ります。」が、それに当たる述べ方である。

### 【解説2：(2)について】

(2)の「相手側」には、「相手」だけではなく、例えば「相手の家族」のように「相手にとって「ウチ」と認識される人物」も含めてとらえるものとする。

(2)は、例えば、「先生」やその家族と話す場合に、「先生は来週海外にいらっしゃるんですね。」あるいは「先生のところに伺いたいんですが……。」などと述べれば、相手側を立てることになり、このような使い方が尊敬語や謙譲語Ⅰの典型的な使い方である、ということである。初めの例は、尊敬語によって＜行為者＞である「先生」を立てる例、後の例は、謙譲語Ⅰによって＜向かう先＞である「先生」を立てる例である。

人物や状況によっては、相手側を立てずに述べてもよい場合や、立てずに述べる方が親しみを出すことができるような場合ももちろんあるが、立てようとする場合の手段として、尊敬語や謙譲語Ⅰがあるわけである。このように相手側を立てて述べるのが、尊敬語や謙譲語Ⅰの最も典型的な使い方である。

なお、話の直接の相手でなくても、話をしているその場にいる人物については、相手に準じて、尊敬語や謙譲語Ⅰで立てることがしばしばある。

### 【解説3：(3)について】

【(3)アについて】 例えば、「先生」やその家族と話すわけではなく、友人と話す場合にも、「先生は来週海外にいらっしゃるんですね。」「先生のところに伺いたいんですが……。」などと、「先生」を立てて述べることがある。この場合の「先生」は、「相手側」ではなく「第三者」であるが、その人物や場面などを総合的に判断して「立てる方がふさわしい」ととらえられているわけである。(3)アは、このような場合を述べたものである。尊敬語や謙譲語Ⅰは、このように第三者を立てる場合にも使われる。

【(3)イについて】 上述の例の友人が、例えば、同じ「先生」の下で一緒に学んだことがある友人なら、一般に、上述の例のように「先生」を立てた述べ方を聞いても、違和感を持たないであろう。だが、例えば、その友人の全く知らない人物で、自分だけが知っている人物のことを話題にする場合に、「昨日、高校の時の先輩が遊びにいらっしやっただすけどね、……」などと立てて述べるとすると、聞いた友人は、自分の全く知らない人物を立てられることになり、ある種の違和感を持つ可能性がある。

このように、自分から見れば、立てるのがふさわしいように見えても、「相手から見れば、立てる対象とは認識されないだろう」と思われる第三者については、立てずに、この例ならば「昨日、高校の時の先輩が遊びに来たんですけどね、……」と述べる方が適切である。(3)イは、このことを述べたものである。

(注) なお、例えば、上司のことを、更にその上司に述べる（例えば、課員が課長のことを部長に述べる）ような場合には、次の①②二通りの考え方ができる。①は、上記(3)イに従った考え方であり、②は、これとはまた別の原理に従った考え方である。

①部長から見れば、課長は、立てる対象とは認識されないであろうから、課長を立てずに述べるのがよいとする考え方

②部長から見れば、課長は、立てる対象とは認識されないであろうが、課員が課長を立てれば、それによってさらに上の部長を立てることもなるはずなので、課長を立ててよいとする考え方

どちらの考え方にも、理があると言える。どちらを採るのがより適切かは、この三者（部長と課長と課員）の間の距離感や、状況などによっても変わってくると考えられる。

こうした点も含めて、(3)イをどこまで適用するかについては、個人差もあるようである。

付 これまでの三分法との関係

これまでは、敬語を「尊敬語」「謙譲語」「丁寧語」の3種類に分けてとらえることが多かったが、ここでは、以上のように「尊敬語」「謙譲語Ⅰ」「謙譲語Ⅱ」「丁寧語」「美化語」の5種類に分けて考えた。敬語をより適切に使うためには、このように分けてとらえることが必要だと考えてのことである。

ここでの5種類の敬語と、これまでの3種類に分けられてきた敬語との関係は、次のとおりである。

こ こ で の 分 類		これまでの分類
尊敬語	「いらっしゃる・おっしゃる」型	尊敬語
謙譲語Ⅰ	「伺う・申し上げる」型	謙譲語
謙譲語Ⅱ(丁寧語)	「参る・申す」型	
丁寧語	「です・ます」型	丁寧語
美化語	「お酒・お料理」型	

## 第2 敬語の形

敬語の形について留意すべき主な点は、次のとおりである。

### 1 尊敬語

#### (1) 動詞の尊敬語

##### ① 動詞の尊敬語の形

「行く→いらっしゃる」のように特定の語形（特定形）による場合と、「お(ご)……になる」(例、読む→お読みになる、利用する→御利用になる)のように広くいろいろな語に適用できる一般的な語形（一般形）を使う場合とがある。

##### [特定形の主な例]

- ・ いらっしゃる (←行く・来る・いる)
- ・ おっしゃる (←言う)
- ・ なさる (←する)
- ・ 召し上がる (←食べる・飲む)
- ・ 下さる (←くれる)
- ・ 見える (←来る)

##### [一般形の主な例]

- ・ お(ご)……になる (後掲[補足ア]参照)
- ・ ……(ら)れる (例：読む→読まれる、利用する→利用される、述べる→述べられる、食べる→食べられる)
- ・ ……なさる (例：利用する→利用なさる)  
(注) 「……なさる」の形は、サ変動詞(「……する」の形をした動詞)についてのみ、その「する」を「なさる」に代えて作ることができる。
- ・ ご……なさる (例：利用する→御利用なさる)  
(注) 「ご……なさる」の形は、サ変動詞(「……する」の形をした動詞)についてのみ、「する」を「なさる」に代えるとともに「ご」を付けて作ることができる。ただし、「ご」がなじまない語については、作ることができない(後掲の[補足ア：「お(ご)……になる」を作る上での留意点]に準じる留意が必要である)。
- ・ お(ご)……だ (例：読む→お読みだ、利用する→御利用だ)  
(注1) 「だ」を丁寧語「です」に変えた「お(ご)……です」の形で用いることが多い。  
(注2) 「お(ご)……だ」「お(ご)……です」を作る上では、後掲の[補足ア：「お(ご)……になる」を作る上での留意点]に準じる留意が必要である。  
(注3) 「御存じだ(御存じです)」は「知っている」意味の尊敬語である。
- ・ お(ご)……くださる (例：読む→お読みくださる、指導する→御指導くださる)  
(注) 「お(ご)……くださる」を作る上では、後掲の[補足ア：「お(ご)……になる」を作る上での留意点]に準じる留意が必要である。



(注) 「お(ご)……する」は後述のように謙譲語Ⅰの形であり、これを尊敬語として使うのは適切ではない。  
(例えば、「相手が持っていくか」ということを尋ねる場合、「お持ちしますか。」と言うのは不適切で、「お持ちになりますか。」と言うのが適切である。)

(注) 「ご……される」「御説明される」「御利用される」などは、本来、尊敬語の適切な形ではないとされている。

### [補足ア：「お(ご)……になる」を作る上での留意点]

「お(ご)……になる」を作る上で留意すべき点は次のとおりである。

#### [ア-1：「お」「ご」の使い分け]

一般に、動詞が和語の場合は「読む→お読みになる」「出掛ける→お出掛けになる」のように「お……になる」となり、漢語サ変動詞の場合は「利用する→御利用になる」「出席する→御出席になる」のように「ご……になる」となる。

#### [ア-2：変則的な「お(ご)……になる」]

次の場合は、変則的な作り方となる。

- ・御覧になる (←見る)
- ・おいでになる (←行く・来る・いる)
- ・お休みになる (←寝る)
- ・お召しになる (←着る)

#### [ア-3：「お(ご)……になる」が作れない場合]

慣習上、「お(ご)」と組み合わせることがなじまず、「お(ご)……になる」の形が作れない動詞もあるので、注意を要する。

例：×お死になる (→お亡くなりになる、亡くなられる)、×御失敗になる (→失敗なさる、失敗される)、×御運転になる (→運転なさる、運転される)

### ②可能の意味を添える場合

動詞に可能の意味を添えて、かつ尊敬語にするには、まず尊敬語の形にした上で可能の形にする。

例：召し上がれる、お読みになれる、御利用になれる (まず、「召し上がる」「お読みになる」「御利用になる」の形にした上で、可能の形にする。)

(注) 「お(ご)……できる」は、後述のように謙譲語Ⅰ「お(ご)……する」の可能形であり、これを尊敬語の可能形として使うのは適切ではない。(例えば「全開正しくお答えできたら、賞品を進呈します」は不適切で、「お答えになれたら」とするのが適切である。)

### (2) 名詞の尊敬語

一般には、「お名前」「御住所」のように、「お」または「御」を付ける。ただし、「お」「御」のなじまない語もあるので、注意を要する。(6の(1)参照。)

このほか、「御地(おんち)」「貴信」「玉稿(ぎょっこう)」のように、「おん」「貴」「玉」を付けたり、「御高配」「御尊父(様)」「御芳名」「御令室(様)」のように、「御」とともに「高」「尊」「芳」「令」などを加えたりして、尊敬語として使うものがある。ただし、これらのほとんどは書き言葉専用である。

### (3) 形容詞などの尊敬語

形容詞やいわゆる形容動詞の場合は、語によっては「お忙しい」「御立派」のように、「お」「ご」を付けて尊敬語にすることができる。

また、「お」「ご」のなじまない語でも、「(指が)細くていらっしゃる」「積極的でいらっしゃる」のように、「……くていらっしゃる」「……でいらっしゃる」の形で尊敬語にすることができる。「お」「ご」を付けられる語の場合は、「お忙しくていらっしゃる」「御立派でいらっしゃる」のように「お」「ご」を付けた上で、「……くていらっしゃる」「……でいらっしゃる」の形と併用することもできる。

### (4) 「名詞+だ」に相当する尊敬語

「名詞+だ」に相当する内容を尊敬語で述べる場合は、「先生は努力家でいらっしゃる」のように「名詞+でいらっしゃる」とする。

## 2 謙譲語 I

### (1) 動詞の謙譲語 I

#### ① 動詞の謙譲語 I の形

「訪ねる→伺う」のように特定の語形(特定形)による場合と、「お(ご)……する」(例:届ける→お届けする,案内する→御案内する)のように広くいろいろな語に適用できる一般的な語形(一般形)を使う場合とがある。

#### [特定形の主な例]

- ・伺う (←訪ねる・尋ねる・聞く)
- ・申し上げる (←言う)
- ・存じ上げる (←知る)

(注)「存じ上げる」は、「存じ上げている(います,おります)」の形で、「知っている」の謙譲語として使う。ただし、否定の場合は、「存じ上げていない(いません,おりません)」とともに、「存じ上げない」「存じ上げません」も使われる。

- ・差し上げる (←上げる)
- ・頂く (←もらう)
- ・お目に掛かる (←会う)
- ・お目に掛ける,御覧に入れる (←見せる)
- ・拝見する (←見る)
- ・拝借する (←借りる)

### [一般形の主な例]

- ・お(ご)……する (後掲[補足イ]参照)
- ・お(ご)……申し上げる (後掲[補足イ]参照)
- ・……ていただく (例：読む→読んでいただく、指導する→指導していただく)
- ・お(ご)……いただく (例：読む→お読みいただく、指導する→御指導いただく)

(注) 「お(ご)……いただく」を作る上では、前掲「1 (1)」①の[補足ア：「お(ご)……になる」を作る上での留意点]に準じる留意が必要である。

### [補足イ：「お(ご)……する」「お(ご)……申し上げる」を作る上での留意点]

「お(ご)……する」「お(ご)……申し上げる」を作る上で留意すべき点は、次のとおりである。

#### [イー1：「お(ご)……する」「お(ご)……申し上げる」が作れるための基本的条件]

これらの語は<向かう先>を立てる謙譲語Ⅰなので、<向かう先>の人物がある動詞に限って、これらの形を作ることができる。例えば「届ける」や「案内する」は<向かう先>の人物があるので、「お届けする(お届け申し上げる)」「御案内する(御案内申し上げる)」という形を作ることができるが、例えば「乗る」や「帰宅する」は<向かう先>の人物が想定できないので、「お乗りする(お乗り申し上げる)」「御帰宅する(御帰宅申し上げる)」という形を作ることができない。

なお、<向かう先>の人物があっても、例えば「おわかれする(お憧れ申し上げる)」「御賛成する(御賛成申し上げる)」とは言わない、というように、慣習上「お(ご)……する」「お(ご)……申し上げる」の形が作れない場合もある。

#### [イー2：「お」「ご」の使い分け]

一般に、動詞が和語の場合は「届ける→お届けする」「誘う→お誘いする」のように「お……する」となり、漢語サ変動詞の場合は、「案内する→御案内する(御案内申し上げる)」「説明する→御説明する(御説明申し上げる)」のように「ご……する」となる。

### ② 可能の意味を添える場合

動詞に可能の意味を添えて、かつ謙譲語Ⅰにするには、まず謙譲語Ⅰの形にした上で可能の形にする。

例：伺える・お届けできる・御報告できる(まず、「伺う」「お届けする」「御報告する」の形にした上で、可能の形にする。後二者の場合、「する」を「できる」に変えることで、可能の形になる)

### (2) 名詞の謙譲語Ⅰ

一般には、「(先生への)お手紙」「(先生への)御説明」のように、「お」または「御」を付ける。ただし、「お」「御」のなじまない語もあるので、注意を要する。(6の(1)を参照。)

このほか、「拝顔」「拝眉」のように、「拝」の付いた謙譲語Ⅰもある。

(注)「拝見」「拝借」などは、「拝見する」「拝借する」のように動詞として使うほうが一般的である。

### 3 謙譲語Ⅱ(丁寧語)

#### (1) 動詞の謙譲語Ⅱ

「参る」などの幾つかの特定の語形のほかには、一般的な語形としては、「……いたす」があるだけである。

##### [特定形の主な例]

- ・参る(←行く・来る)
- ・申す(←言う)
- ・いたす(←する)
- ・おる(←いる)
- ・存じる(←知る・思う)

(注)「知る」意味の「存じる」は、「存じています(おります)」の形で、「知っている」の謙譲語Ⅱとして使う。ただし、否定の場合は、「存じていません(おりません)」とともに、「存じません」も使われる。

(注)可能の意味を添える場合には、例えば「参れる」のように、まず、「参る」の形にした上で、可能の形にする(例えば、「申し訳ありません。明日は参れません。」など)。

##### [一般形]

- ・……いたす(例、利用する→利用いたす)

(注)「……いたす」は「……する」の形をした動詞(サ変動詞)のみに適用可能である。

##### [「謙譲語Ⅰ兼謙譲語Ⅱ」の一般形]

上述の「謙譲語Ⅰ兼謙譲語Ⅱ」の一般的な語形として「お(ご)……いたす」がある。

#### (2) 名詞の謙譲語Ⅱ

「愚見」「小社」「拙著」「弊社」のように、「愚」「小」「拙」「弊」を付けて、謙譲語Ⅱとして使うものがある。ほぼ、書き言葉専用である。

### 4 丁寧語

「です」「ます」を付ける上で留意を要する点は特にない。「高いです」のように形容詞に「です」を付けることについては抵抗を感じる人もあろうが、すでにかなりの人が許容するようになってきている。特に「高いですね」「高いですよ」「高いですか」などという形で使うことに抵抗を感じる人はほとんどないであろう。

##### [「形容詞+ございます」]

「ございます」を形容詞に付ける場合の形の作り方は、次のとおりである。

- ・「……あい」の場合 例、「たかい」→「たこうございます」
- ・「……い」の場合 例、「おいしい」→「おいしゅうございます」
- ・「……うい」の場合 例、「かるい」→「かるうございます」
- ・「……おい」の場合 例、「おもい」→「おもうございます」

(注)「……えい」という形の形容詞はない。

## 5 美化語

美化語のほとんどは名詞あるいは「名詞+する」型の動詞であり、一般に「お酒」「お料理(する)」のように、「お」を付ける。ただし、「お」のなじまない語もあるので、注意を要する。なお、一部には、「御祝儀」のように、「御」による美化語もある。

## 6 二つ以上の種類の敬語にわたる問題

### (1) 「お」と「御」

「お」あるいは「御」を付けて敬語にする場合の「お」と「御」の使い分けは、「お+和語」「御+漢語」が原則である。

#### 〔「お+和語」の例〕

「お名前」「お忙しい」(尊敬語)

「お手紙」(立てるべき人からの手紙の場合は尊敬語、立てるべき人への手紙の場合は謙譲語Ⅰ)

「お酒」(美化語)

#### 〔「御+漢語」の例〕

「御住所」「御立派」(尊敬語)

「御説明」(立てるべき人からの説明の場合は尊敬語、立てるべき人への説明の場合は謙譲語Ⅰ)

「御祝儀」(美化語)

ただし、美化語の場合は、「お料理」「お化粧」など、漢語の前でも「お」が好まれる。また、美化語の場合以外にも、「お加減」「お元気」(いずれも尊敬語で、「お+漢語」の例)など、変則的な場合もあるので注意を要する。

なお、以上は名詞・形容詞などの例を挙げたが、動詞の尊敬語の形「お(ご)……になる」「お(ご)……なさる」「お(ご)……くださる」、謙譲語Ⅰの形「お(ご)……する」「お(ご)……申し上げる」、謙譲語Ⅰ兼謙譲語Ⅱの形「お(ご)……いたす」などを作る場合についても、「お」「御」の使い分けは、「お+和語」「御+漢語」が原則である。

なおまた、いずれの場合についても、語によっては「お」「御」のなじまないものもあるので注意を要する。

## (2) 「二重敬語」とその適否

一つの語について、同じ種類の敬語を二重に使ったものを「二重敬語」という。例えば、「お読みになられる」は、「読む」を「お読みになる」と尊敬語にした上で、更に尊敬語の「……れる」を加えたもので、二重敬語である。

「二重敬語」は、一般に適切ではないとされている。ただし、語によっては、習慣として定着しているものもある。

### [習慣として定着している二重敬語の例]

- ・(尊敬語) お召し上がりになる, お見えになる
- ・(謙譲語Ⅰ) お伺いする, お伺いいたす, お伺い申し上げる

## (3) 「敬語連結」とその適否

二つ(以上)の語をそれぞれ敬語にして、接続助詞「て」でつなげたものは、上で言う「二重敬語」ではない。このようなものを、ここでは「敬語連結」と呼ぶことにする。例えば、「お読みになっていらっしゃる」は、「読んでいる」の「読む」を「お読みになる」に、「いる」を「いらっしゃる」にしてつなげたものである。つまり、「読む」「いる」という二つの語をそれぞれ別々に敬語(この場合は尊敬語)にしてつなげたものなので、「二重敬語」には当たらず、「敬語連結」に当たる。

「敬語連結」は、多少の冗長感が生じる場合もあるが、個々の敬語の使い方が適切であり、かつ敬語同士の結び付きに意味的な不合理がない限りは、基本的に許容されるものである。

### [許容される敬語連結の例]

- ・お読みになっていらっしゃる  
(上述。「読んでいる」の「読む」「いる」をそれぞれ別々に尊敬語にしたもの。)
- ・お読みになってくださる  
(「読んでくれる」の「読む」「くれる」をそれぞれ別々に尊敬語にしたもの。)
- ・お読みになっていただく  
(「読んでもらう」の「読む」を尊敬語に、「もらう」を謙譲語Ⅰにしたもの。尊敬語と謙譲語Ⅰの連結であるが、立てる対象が一致しているので、意味的に不合理はなく、許容される。)
- ・御案内してさしあげる  
(「案内してあげる」の「案内する」「あげる」をそれぞれ別々に謙譲語Ⅰにしたもの。)

### [不適切な敬語連結の例]

- ・伺ってくださる・伺っていただく  
(例えば「先生は私の家に伺ってくださった。」「先生に私の家に伺っていただいた。」は、「先生が私の家を訪ねる」ことを謙譲語Ⅰ「伺う」で述べているため、「私」を立てることになる点が不適切であり、結果として、「伺ってくださる」あるいは「伺っていただく」全体も不適切である。「隣の窓口で伺ってください。」のような「伺ってください」も、同様に、「隣の窓口」を立てることになるため、不適切である。)

(注) ただし、これらは、次のような限られた場合には、問題のない使い方となる。

- ①「田中さんが先生のところに伺っていただきました。」「田中さんに先生のところに伺っていただきました。」
- ②「鈴木さん、すみませんが、先生のところに伺ってくださいますか。」

①②では、「伺う」が＜向かう先＞の「先生」を立て、「くださる」あるいは「いただく」が「田中さん」や「鈴木さん」を立てている。また、「先生」に比べれば、「田中さん」や「鈴木さん」は、この文脈では「立てなくても失礼に当たらない人物」ととらえられている（例えば、①②の文を述べている人と「田中さん」や「鈴木さん」が、共に「先生」の指導を受けた間柄であるなど）、というような場合である。

このように、その行為の＜向かう先＞が「立てるべき人物」であって、かつ行為者が＜向かう先＞に比べれば「立てなくても失礼に当たらない人物」である、という条件を満たす場合に限っては、「伺ってくださる」などの形を使うことができる。

#### ・御案内してくださる・御案内していただく

(例えば「先生は私を御案内して下さった。」「私は先生に御案内していただいた。」は、「先生が私を案内する」ことを謙譲語「御案内する」で述べているため、「私」を立てることになる点が不適切であり、結果として「御案内してくださる」あるいは「御案内していただく」全体も不適切である。「して」を削除して「御案内くださる」「御案内いただく」とすれば、「お(ご)……くださる」「お(ご)……いただく」という適切な敬語のパターンを満たすため〔本節の上記(1)(2)参照。〕、適切な敬語となる。「……ください」の場合についても同様である。)

(注) ただし、この場合についても、例えば次のような限られた場合には、問題のない使い方となる。事情は、先の「伺ってくださる・伺っていただく」の場合と同様である。

- ①「田中さんが先生を御案内して下さいました。」「田中さんに先生を御案内していただきました。」
- ②「鈴木さん、すみませんが、先生を御案内してくださいますか。」

## 付 敬語との関連で注意すべき助詞の問題

例えば、「自分が先生の指導を受けた」という内容を「くださる」あるいは「いただく」を使って述べる場合は、次のいずれかの形を使う。

先生が(は)私を指導してくださった／御指導くださった。

私が(は)先生に指導していただいた／御指導いただいた。

ここで「私」を表現しない場合は、次のようになる。

先生が(は)指導してくださった／御指導くださった。

先生に指導していただいた／御指導いただいた。

それぞれ、敬語でない形「くれる」「もらう」に戻して考えれば、助詞が以上のようになるべきことは容易に理解できる。

これらの内容を述べるのに、次のように述べるのは不適切である。

先生が(は)指導していただいた／ご指導いただいた。

確かに「先生が指導する」という内容であるため、上記のような述べ方をしたくなる心

理が働くところではあるが、上の文全体の動詞「いただく」は「もらう、受ける」意味であるから、指導を受ける側「私」を主語として述べ、「先生」の後には「に」を付けなければならないことになる。「私」が表現されない場合でも、この事情は変わらない。

「先生が(は)指導していただいた／御指導いただいた。」と述べれば、「先生」が別の人物（例えば「先生の恩師」）の指導を受けたことになってしまう。



## 第3章 敬語の具体的な使い方

本章においては、敬語の具体的な使い方に関する様々な疑問や問題点に対して、どのように使えばよいのか、また、どのように考えればよいのか、といった点を解説していく。全体の構成は、次のとおりである。

第1 敬語を使うときの基本的な考え方

第2 敬語の適切な選び方

第3 具体的な場面での敬語の使い方

説明に当たっては、提示された問題点に対して、解説1（どのように敬語を使えばよいのか）、解説2（どのように考えればよいのか）に、適宜、分けて述べることにする。

### 第1 敬語を使うときの基本的な考え方

1 現代の敬語は、相互尊重を基本として使う。

【1】 敬語は、人間を上下に位置付けようとするものであり、現代社会には、なじまないようにも思う。どう考えれば良いのだろうか。

【解説】第1章において述べたように、敬語は、古代から現代に至る日本語の歴史の中で、一貫して重要な役割を担い続けているが、敬語の持つ意味は時代によって変わっている。敬語が人間の上下関係を表すことと密接に関連している時代もあった。しかし、現代社会においては、その人を尊重しようという気持ちを表すこと、その人の立場に配慮すること、その人と親しいか親しくないかといった親しさの程度を示そうとすることなどの意識に基づいて使われていると言ってよい。

すべての人は基本的に平等である。だからこそ、お互いに尊重し合う気持ちが必要なのである。その気持ちこそが敬意であり、それを言い表すために敬語が必要なのだと言える。

2 敬語は社会的な立場を尊重して使う。

【2】 尊敬している人には敬語を使って話したいのだが、社会人は、尊敬していない人にまで敬語を使わなければならないのだろうか。

【解説】まず、確認しておきたいことは、尊敬の気持ちと敬語との関係である。敬語は、敬意に基づき選択される言葉であるが、敬意は必ずしも尊敬の気持ちだけではない。その人の「社会的な立場を尊重すること」も敬意の現れの一つである。仮に尊敬できないと感じられる人であっても、その人の立場・存在を認めようとすることは、一つ

の「敬意」の表現となり得るのであり、その気持ちを敬語で表すことは可能なのである。それは、自分の気持ちを偽っていることにはならない。むしろ、敬語を使うべき場面で敬語を使わないことは、社会人として、相手に礼を失したことになるおそれがあることに留意すべきであろう。敬語の役割の一つには「社会人としての常識を持っている自分自身」を表現するという側面もあるのである。自分自身の尊厳のためにも敬語は使われるのだと、言うことができるだろう。社会人にとって、敬語を使うことの真の意義はそこに見出せるのである。

【3】 自分よりかなり年下の、取引先の会社の若い社員や、子供の担任をしている若い教師などにも、敬語を使う必要があるのだろうか。

【解説】「敬語は年長者に対して使うものだ。」と言われることが多いが、実際には、例えば、取引先など異なる組織にいる相手であれば、年齢にかかわらず使われているものである。また、いくら若いといっても、自分の子供の担任をしている教師であれば、その立場に対する配慮が必要になる。

敬語は、単なる上下関係からでなく、その相手と自分との間の立場や役割を考え、仮に自分が年長であっても、相手を立てて使う場合もあるのだと言えよう。

### 3 敬語は「自己表現」として使う。

【4】 敬語を使うと、自分の気持ちが素直に表せない気がする。むしろ敬語を使わない方が自分らしさを表すことができるのではないだろうか。

【解説】社会生活において、敬語が常に必要になるわけではない。相手や状況によっては、敬語を使わない方が、かえって自分らしさが表現できたり、心の交流が円滑に進んだりする場合もある。そのようなときに、あえて敬語を使わないという判断を自分自身で行うことは適切なことであろう。

一方で、相手や状況によっては、敬語を使わなかったために、相手を尊重する気持ちが十分に伝わらない場合もあり、そのために相手や周りの人々に不愉快な思いをさせてしまうこともある。敬語を使わない表現を選ぶのか、それともここは敬語を使うのか、相手との関係やその場面の状況をよく考えた上で、自らの判断で決めることが必要である。これは、第1章でも述べた「自己表現」の大切さが浮かび上がる瞬間であると言ってよい。

### 4 敬語は過剰でなく適度に使う。

【5】 敬語をたくさん使って丁寧な言葉遣いをしているのに、どうも失礼に感じられる人がいるのだが、どうしてなのだろうか。

【解説】<sup>いんぎん</sup>慇懃無礼と言われるように、言葉は丁寧であるにもかかわらず、態度は無礼であるということがある。敬語をたくさん使えば丁寧になるというわけではない。敬語を

使う際に、相手に対する配慮の意識がなく、むしろ見下しているような気持ちがあるとすれば、いくら敬語を使っても失礼に感じられてしまうものである。また、表現している内容自体が敬語を使うことに合わないような場合もある。失礼な内容については、敬語を使ったからといって、その失礼さが消えるわけではない。

ただし、敬語をたくさん使っているから変だ、などと決め付けることはできない。本当に丁寧な言葉遣いをする人は、そうではない人から見れば、過剰に敬語を使っているように見えてしまうこともある。自分の基準だけで、相手や第三者の言葉遣いが丁寧過ぎる、あるいは逆に、失礼だなどということは決められない。自分の基準だけが正しいと思い込んで、自分の基準を他人に押し付けるようなことは、慎むべきであろう。

## 5 敬語は自分の気持ちにふさわしいものを選んで使う。

【6】 大きな会社なのに「小社」と言ったり、優秀な子供なのにわざと「愚息」と書いたり、自信を持って書いた原稿まで「拙稿」と表すことなどは、何か卑屈な言い方に感じてしまう。こうした表現については、どう考えれば良いのだろうか。

【解説】 敬語を使うことによって、相手にかかわるものは、大きく、高く、立派で、美しいと表すことができる（御高配、玉稿、御芳名など）。反対に、自分にかかわるものは、小さく、低く、粗末だと表すこともできる（小社、愚見、拙稿など）。しかし、それは飽くまでも言葉としての約束事を表そうとするものであって、実際にそのように認識しているというわけではない。

このような言い方は、伝統的になされているものであり、卑屈な言い方というよりも、自分にかかわるものを小さく表すことによって、相手に対する配慮を示す意識で使われているものだと考えられる。このような表現の形が自分の気持ちに合っていると思うなら使えばよいし、合わないと感じるのであれば必ずしも使う必要はない。

このような敬語のほかにも、自信を持って作った料理でも、「お口に合うかどうか分かりませんが、どうぞ。」といった表現などがある。これも、おいしくないのに勧めるということではなく、自分の判断を押し付けないという意味で相手に対する配慮を示したものである。もちろん、「すごくおいしいものですから、どうぞ。」というように、自分の判断を率直に表すことで、相手に対する配慮を示すことも可能である。

## 第2 敬語の適切な選び方

### 1 尊敬語にするための形の問題

【7】 「御利用される」「御説明される」のような形はよく使われていると思うし、自分も、例えば「先生もこの店をよく御利用されるんですか。」などと使ってきたのだが、ある人から、変な敬語だと指摘された。どこが変なのだろうか。

【解説1】 規範的には、「適切な敬語」だとは位置付けられてこなかった形である。したがって、現時点では、「利用される・利用なさる・御利用になる・御利用なさる」などが適切な形だと言える。

【解説2】 「御利用される」の「御……さ」の部分が、「ご……する」という謙讓語Ⅰの形であり、これに「れる」が付いた、＜謙讓語Ⅰ＋尊敬語＞の組合せだとも見られることなどから、規範的には、適切な敬語ではないとする考え方が有力である。

ただし、使う人としては、「御利用さ＋れる」ではなく、「御利用＋される」という意識で使っていると考えられ、その意味では、尊敬語としてあり得る形だと言える。そのため、次第に使われるようになってきており、将来は尊敬語の一つの形として定着していく可能性もある。

【8】 駅のアナウンスで「御乗車できません」と言っているが、この敬語の形は適切なのだろうか。

【解説1】 この場合には、「御乗車できません」ではなく、「御乗車になれません」が適切な形である。あるいは、「御乗車いただけません」という敬語表現も可能である。

【解説2】 「お・ご～できる」というのは、謙讓語Ⅰの可能形である。「自分が届けることができる」ということであれば「お届けできる」、「自分が説明できる」ということであれば「御説明できる」となる。尊敬語の可能形は、「お・ご～になれる」である。この例は、その否定の形なので、「御乗車になれません」が適切な形だということになる。

ただし、特に接客業・ビジネスなどの場合、「(客である)あなたができる」ということを客観的に「可能だ」と言うだけでなく、「あなたにしてもらえる」というように自分が恩恵を受けるような表現に変えることで、敬意を表す形にすることがある。それが、「お・ご～いただける」という敬語の形である。この形を使えば、「御乗車いただけません」という言い方になる。

なお、「21時以降は、御利用できません。」という、しばしば見聞きする言い方がある。その適切な形が「御利用になれません」あるいは「御利用いただけません」であることも、同様に考えられるものである。

【9】 「分かりにくい」や「読みやすい」といった言葉を敬語にしようと思い、「お分かりにくい」、「お読みやすい」と言ったら、変な敬語だと言われた。どう言えば良かったのだろうか。

【解説1】 「分かりにくい」や「読みやすい」といった言葉を尊敬語にするなら、それぞれ、「お分かりになりにくい」、「お読みになりやすい」とすればよい。

【解説2】 「分かりにくい（分かり+にくい）」「読みやすい（読み+やすい）」など、「動詞+形容詞」の形を取るものを尊敬語にする場合には、動詞の部分だけを尊敬語にすればよい。「分かる」なら「お分かりになる」、「読む」なら「お読みになる」として、それに「～にくい」「～やすい」を付ければ良いわけである。

## 2 尊敬語と謙譲語 I の混同の問題

【10】 受付の人に、「担当者に伺ってください。」と言われたが、客に対する言い方としては、何だか妙な感じがした。どこが変なのだろうか。

【解説1】 「担当者に伺ってください」の「伺う」は謙譲語 I である。したがって、客の動作に用いる敬語ではない。

客を立てるためには、尊敬語を用いる必要がある。「担当者に聞いてください。」あるいは「担当者に尋ねてください。」の「聞く」「尋ねる」を尊敬語にすると、「担当者にお聞きください。」あるいは「担当者にお尋ねください。」となる。

【解説2】 「伺う」は謙譲語 I であって、「聞く・尋ねる」という動作の＜向かう先＞を高める敬語である。したがって、「受付の人」側の人物である担当者を高めることになり、尋ねた客を高める敬語にはならない。

同様に、「お聞きする」「お尋ねする」といった敬語も、「伺う」と同じ謙譲語 I である。したがって、「担当者にお聞きしてください。」「担当者にお尋ねしてください。」なども「伺う」と同様に、客の動作に対しては用いることができない。

【11】 「課長、このファイルも会議室にお持ちしますか。」と尋ねたところ、「うん、よろしく頼むよ。」と言われてしまった。私は自分が持っていくつもりではなく、上司である課長が持っていかどうかを尋ねたかったのだが、どう言えば良かったのだろうか。

【解説1】 課長が持っていかどうかを尋ねたかったのであれば、「課長、このファイルも会議室にお持ちになりますか。」と、尊敬語を用いるのが良い。

【解説2】 「お持ちする」は、謙譲語 I である。したがって、自分が持っていかどうかを上司である課長に尋ねたことになってしまう。だからこそ、課長もそのように反応したのであろう。これも、尊敬語を使うべきところ謙譲語 I を用いてしまったために生じた問題である。

【12】 「お知らせ」として配布された文書に、「来週の日曜日に消防設備等の点検に伺いますが、御在宅する必要はありません。」と書いてあった。どうも気になる言い方なのだが、どこが問題なのだろうか。

【解説】「御在宅する」に問題がある。「ご～する」は謙譲語Ⅰを作る形式だからである。この場合は、在宅している相手を立てて表現したい場合であるので、「御在宅なさる必要…」あるいは、より簡潔に「御在宅の必要…」などと尊敬語を用いるべきである。

### 3 謙譲語Ⅱ（丁寧語）に関する形の問題

【13】 「御持参ください」、「お申し出ください」、「お申し込みください」などといった言い方には、「参る」や「申す」など、本来自分に使う敬語が入っているのでもちろん気になっている。これらは、適切な使い方なのだろうか。

【解説1】「参る」や「申す」は、謙譲語Ⅱに当たる敬語である。しかし、「御持参ください」、「お申し出ください」、「お申し込みください」などといった表現の中に含まれる「参る」や「申す」は、既に謙譲語Ⅱとしての働きを失っているものと言ってよい。したがって、これらの表現を「相手側」の行為に用いるのは問題ない。

【解説2】「御持参ください」「お申し出ください」という表現が気になる場合には、「お持ちください」「おっしゃってください」などと言い換えればよい。「お申し込みください」は、状況によっては「御応募ください」などに代えることができるだろう。

【14】 社長から、課長である私が、部下に企画をもっと積極的に出せと指示しておくように言われた。「はい、そのように申し伝えておきます。」と返事をしたのだが、これでは部下を立てることになってしまうのだろうか。

【解説】「申し伝えておく」というのは、「そのように部下に言うておく」あるいは「そのように部下に伝えておく」ということを、「申す（謙譲語Ⅱ）」という敬語を使って表現したものである。つまり、ここでは、「相手」である社長に対して改まって述べたものであって、その＜向かう先＞である「部下」を立てるものではない。したがって、この場合、問題のない表現であると言ってよい。

### 4 自分側に「お・御」を付ける問題

【15】 自分のことに「お」や「御」を付けてはいけないと習ったような気がするが、「お待ちしております」や「御説明をしたいのですが」などと言うときに、自分の動作なのに、「お」や「ご」を付けるのは、おかしくないのだろうか。これは、どう考えれば良いのだろうか。

【解説1】自分側の動作やものごとなどにも、「お」や「御」を付けることはある。

「お」や「御」を自分のことに付けてはいけないのは、例えば、「私のお考え」「私の御理解」「私のお帽子」など、自分側の動作やものが相手側や第三者に直接かわらない場合である。自分の動作やものごとでも、それが＜向かう先＞を立てる場合であれば、謙讓語Ⅰとして、「(先生を) お待ちする」「(山田さんに) 御説明をしたい」など、「お」や「御」を付けることには全く問題がない。(→第2章参照。)

## 5 「いただく」と「くださる」の使い方の問題

【16】 いつも、「御利用いただきましてありがとうございます。」と言ったり、書いたりしているのだが、「御利用くださりまして」の方が良いのだろうか。どちらが適切なのだろうか。

【解説1】 「御利用いただく」は謙讓語Ⅰ、「御利用くださる」は尊敬語である。つまり、「(自分側が相手側や第三者に) 御利用いただく」、「(相手側や第三者が) 御利用くださる」という基本的な違いがある。しかし、立てるべき対象は、どちらも同じであり、また、恩恵を受けるという認識を表す点も同様であるため、どちらの言い方も適切に敬語が用いられているものである。

【解説2】 謙讓語Ⅰの「御利用いただく」の使い方には、問題があると感じている人もいる。その理由としては、「利用する」のは相手側や第三者なのだから尊敬語である「御利用くださる」を使うべきだということなどが挙げられているようだ。

しかし、「御利用いただく」は、「私はあなたが利用したことを(私の利益になることだと感じ) 有り難く思う」という意味を持った敬語である。「利用する」のは相手側や第三者、「御利用いただく」のは自分側、という点がやや理解されにくい敬語であるが、自分側の立場から相手側や第三者の行動を表現した敬語であるため、用法に特に問題があるわけではない。

また、「御利用いただきまして…」と「御利用くださりまして…」のどちらが適切か、どちらが丁寧か、という判断や感じ方については個人差が大きいようであるが、基本的には、どちらもほぼ同じように使える敬語だと言ってよい。

## 6 「させていただく」の使い方の問題

【17】 「させていただく」を余り使わない方が良くないと聞いたが、実際には、見聞きすることが多い。また、自分でも「それでは、発表させていただきます。」などと言ってしまいが、どう考えれば良いのだろうか。

【解説1】 「(お・ご) ~ (さ) せていただく」といった敬語の形式は、基本的には、自分側が行うことを、ア) 相手側又は第三者の許可を受けて行い、イ) そのことで恩恵を受けるといった事実や気持ちのある場合に使われる。したがって、「取らせていただく」「発表させていただきます」など、「~ (さ) せていただく」を用いた表現については、ア)、イ) の条件をどの程度満たすかどうかによって、適切な場合と余り適切だとは言えない場合とがある。

【解説2】 次の①～⑤の例では、適切だと感じられる程度が異なる。

①相手が所有している本をコピーするため、許可を求めるときの表現

「コピーを取らせていただけますか。」

②研究発表会などにおける冒頭の表現

「それでは、発表させていただきます。」

③店の休業を張り紙などで告知するときの表現

「本日、休業させていただきます。」

④結婚式における祝辞の表現

「私は、新郎と3年間同じクラスで勉強させていただいた者です。」

⑤自己紹介の表現

「私は、〇〇高校を卒業させていただきました。」

上記の例①の場合は、ア)、イ)の条件を満たしていると考えられるため、基本的な用法に合致していると判断できる。②の例も同様だが、ア)の条件がない場合には、やや冗長な言い方になるため、「発表いたします。」の方が簡潔に感じられるようである。③の例は、条件を満たしていると判断すれば適切だが、②と同様に、ア)の条件がない場合には「休業いたします。」の方が良いと言えるだろう。④の例は、ア)とイ)の両方の条件を満たしていないと感じる場合には、不適切だと判断される。⑤の例も、同様である。ただし、④については、結婚式が新郎や新婦を最大限に立てるべき場面であることを考え合わせれば許容されるという考え方もあり得る。⑤については、「私は、卒業するのが困難だったところ、先生方の格別な御配慮によって何とか卒業させていただきました。ありがとうございました。」などという文脈であれば、必ずしも不適切だとは言えなくなる。

### 第3 具体的な場面での敬語の使い方

#### 1 自分や相手の呼び方の問題

【18】 自分のことを「僕」と呼んでいるのだが、「僕」と「わたし」はどのように使い分ければ良いのだろうか。

【解説1】 基本的には、「僕」は、日常の生活で用いる言葉であり、「わたし」は、やや改まった場で用いる言葉である。「私(わたくし)」は、「わたし」よりも更に改まった公的な場などで用いられる。したがって、例えば、式典や会議の場、面接試験などのときには、「僕」よりも、「わたし」あるいは「私(わたくし)」を用いた方が、その場面にふさわしい選択だと言える。

【解説2】 自分のことをどう呼ぶかということについて、必ずこうしなければいけないという決まりがあるわけではない。実際には、どういう場面においても、「僕」(あるいは「わたし」とだけ呼んでいる人もいるだろう。また、「おれ」「僕」「わたし」「私



(わたくし)」を場面に応じて使い分けている人もいるだろう。

自分自身のことをどういう言葉で呼ぶかという問題は、自分がどういう自分でありたいのか、自分をどういう自分として表現したいのか、ということとも深く関連している。「おれ」「僕」「わたし」「私(わたくし)」など、自分を呼ぶ様々な言葉の中から、自分を表すのにふさわしいと思える言葉を選択すること、また、状況に応じてそれらを使い分けること、あるいは使い分けないことも含め、そうしたことが自分をどう表現しようとするのかという、「自己表現」の在り方につながっているのである。

【19】 会議の司会をしているとき、1年先輩の同僚に、「あなたはどう考えますか。」と言ったのだが、「あなた」は丁寧な言葉だとは思いつつ、ちょっと違和感を覚えた。「あなた」という呼び方については、どう考えれば良いのだろうか。

【解説1】「あなた」は、本来は遠くを指し示す「あなた(彼方)」という言葉から生じ、敬意の高い敬語であった。しかし、現在では、年齢や立場が同等、あるいは下位にある人に対して使うことが一般的となっており、上位者に対しては用いにくくなっている。また、相手の名前を示さずに呼ぶことで、中立的な表現となる反面、やや冷たい響きを感じられると言える。会議などで用いることに問題はないが、そうした性質を感じさせるおそれがある点には留意する必要があるだろう。

【解説2】「あなた」には【解説1】で述べたような性質があることを考慮すれば、名前を知っている相手に対しては名前を呼ぶことによって、名前を知らない相手に対してはその人の動作などに敬語を使うことによって、「あなた」を使わないようにすることもできる。例えば、「あなたはどう考えますか。」ではなく、「佐藤さんはどう考えますか。」、「お考えをお聞かせください。」などという言い方である。

「あなた」には中立的な語感があることから、例えば、会議の席上や授業中、あるいは面接試験などでは、比較的多く用いられている。「話し手」と「聞き手」の双方が、お互いにその点を理解しているのなら、「あなた」を使っても特に問題はないだろう。ただし、夫婦間の会話などでは中立的な語感から離れて、親しみの感じられる言葉として用いられている。

【20】 手紙のあて名書きで気になる点がある。学校の教師に出す手紙のあて名は「〇〇様」で良いのだろうか。また、「〇〇中学校 山田一郎先生御中」と書いたが、これで良いのだろうか。

【解説】「〇〇先生」ではなく、「〇〇様」と書くこと自体は誤りではないが、自分が生徒や学生、あるいは、生徒や学生の親などの立場から書く場合には、「〇〇先生」の方が適切だと言える。「〇〇中学校 山田一郎先生御中」といった書き方は、不適切である。「〇〇中学校 山田一郎先生」とすれば良い。「御中」というのは、具体的な人ではなく、その組織や機関の中にいる関係者へあてる、という意味を表す「脇付け」である。「山田一郎」という氏名が明らかなのであれば、その点と矛盾するので、不適切な表現になる。

## 2 「ウチ・ソト」の関係における問題

【21】 自分の家族について改まった場面で話すときには、「父・母」と呼ばなければいけないのだろうか。

【解説】 ふだんは、「お父さん・お母さん・お祖父さん・お祖母さん・伯父（叔父）さん・伯母（叔母）さん・お兄さん・お姉さん」などと話し掛けている相手を、ウチ扱いとする場合には、「父・母・祖父・祖母・伯父（叔父）・伯母（叔母）・兄・姉」と言うことになる。例えば、改まった面接などの場面で、自分側について言及するときには、基本的に「父・母」のように言う方が良い。

ただし、日常生活の場で、相手が親しい関係のときには、「父・母・祖父・祖母」などの言葉を使うと、やや改まり過ぎていると感じられるかもしれない。そのときには、状況に応じて、「父親・母親・親父・御袋・おじいちゃん・おばあちゃん」などといった言葉を使い分ければ良いだろう。

【22】 保護者からの電話で、同僚の田中教諭の不在を伝えるときに、「田中先生はいらっしゃいません。」と伝えたが、それで良かったのだろうか。「田中はおりません。」と伝えた方が良かったのだろうか。

【解説1】 この場合、「ウチ・ソト」の意識に基づけば、「田中はおりません。」と伝えた方が良いことになる。しかし、相手が保護者の場合、「ウチ・ソト」の意識ではなく、「田中先生はいらっしゃいません。」と伝えることに問題はない。

【解説2】 同僚の田中教諭に関して「田中先生はいらっしゃいません。」と尊敬語を用いた表現は、身内の人物は立ててはいけないという「ウチ・ソト」の意識からすれば、問題があるとも言える。しかし、生徒の保護者に対しては、「田中はおりません。」ではなく「田中先生はいらっしゃいません。」という言い方を支持する人が多いようである。学校では、「ウチ・ソト」の意識よりも、生徒を基準にして、その教師であるという点を優先させるからだと考えられる。

なお、同僚を「田中先生」と呼ぶことに抵抗がある場合には、「田中教諭」と職名で呼ぶ方法もある。この方がより中立的な言い方になると言えよう。

【23】 自分が日常は敬語を使って話している田中部長のことを、取引先の社員に話すときにウチ扱いにすることは分かるのだが、「田中」と呼び捨てにするのはどうも抵抗がある。特に田中部長が同席しているときに、「田中」とは言いにくいのだが、どう考えれば良いのだろうか。

【解説1】 「田中部長」をウチ扱いにする（自分側の人物として扱う。）ときには、「田中」と呼ぶことに問題はない。ほかにも、「部長の田中」というように、「部長」を職階として示した上でウチ扱いにして呼ぶことができる。ただし、「田中部長」は、部長を立てることになるので、外に対して使う場合には不適切である。

【解説2】 上司である田中部長のことを「田中」と呼ぶのは、心理的な抵抗はあるかもし

れないが、飽くまでも「ウチ・ソト」の関係でとらえた表現なのであって、日常の場面で田中部長を呼び捨てにすることは異なる。

改まった場面では「弊社の部長」、ややくだけた場面では「ウチの部長」などと言うことで、「田中」という名前に触れずに表現することもできる。その場合の「部長」は、単に職階を示していると考えられる。

【24】 社内の忘年会で司会をすることになった。最初に、社長からのあいさつがあるのだが、その時、「社長からごあいさつをいただきます。」と「社長からごあいさつを申し上げます。」のどちらを言えば良いのだろうか。

また、社外の人が多くいる会で司会をすることになった場合は、どうすれば良いのだろうか。

【解説1】 社員だけの忘年会などの場合は、社長を立てる敬語を用いて、「社長からごあいさつをいただきます。」と言えば良い。また、社外の人が多くいる会の場合には、その人たちを立てる敬語を用いて「社長からごあいさつを申し上げます。」と言えば良いだろう。

【解説2】 「社長からごあいさつをいただきます。」の、「いただく」は謙譲語Ⅰであり、社長を立てるための敬語である。したがって、「ごあいさつ」も社長を立てるための尊敬語となる。会社内での立場だけを考慮すれば良いので、飽くまでも社長は立てるべき存在となる。したがって、社員だけの忘年会などの場合には、「社長からごあいさつをいただきます。」が適切な表現となる。

それに対して、「社長からごあいさつを申し上げます。」の、「申し上げる」は謙譲語Ⅰであり、<向かう先>となる人たちを立てるための敬語である。したがって、ここでの「ごあいさつ」も<向かう先>となる「あいさつを聞く人たち」を立てるための謙譲語Ⅰとなる。社外の人が多くいる場合には、会社のウチ・会社のソトといった関係が生じるので、「ソト」の人を立て、「ウチ」の社長は立てないほうが良い。したがって、「社長からごあいさつを申し上げます。」の方が適切な表現になるわけである。

---

<以下の問いについては、最終チェックがまだ済んでいないものである。>

【25】 係長である自分が課長と一緒に部長室に行き、3人で話した。その時に、「課長は、このようにおっしゃっていました。」と言ったところ、後で課長に「あのような場面では、わたしには敬語を使わなくていい。」と注意されてしまった。課長も部長も上司なので、どちらにも敬語を使った方が良いと思ったのだが、どう考えれば良いのだろうか。

【解説】特に会社などで、同じ系列にいる二人の上位者に対して敬語を使う場合、この例のように、係長である自分が、部長を相手として、課長のことを伝える場合などには、二人の立場や関係を考えて敬語を使う必要がある。

第2章で述べたように、相手である部長から見れば、課長は「立てる対象」とは認識されないだろうから、課長を立てずに「申しおりました」などと謙譲語Ⅱを用いた方がよいとする考え方がある。課長をウチ扱いにするという意識からも、同様に「申しおりました」が選ばれることになる。これに対して、係長が課長を立てれば、それによって更に上の部長も立てることになるので、「おっしゃっていました」と尊敬語を用いてもよいとする考え方もある。ただし、その場合でも、課長に対する敬語を抑え気味にして、例えば、「言われていました」といった程度の敬語を用いる配慮も必要になってくる。

### 3 「ねぎらい」と「褒め」の問題

【26】 時間外に仕事について教えてくれた上司に「どうも御苦勞様でした。」と言ったら、「御苦勞様はないだろう。」と笑われてしまった。それで、年度末の書類作成に追われた上司が帰る時に、「部長、今日は本当に御苦勞様でした。」ではない言い方を考えてみたのだが、適切な表現が浮かばず、そのままになってしまった。そういう気持ちを表したいときには、どうすれば良いのだろうか。

【解説1】仕事について教えてくれた上司に対しては、「どうもありがとうございました。(大変助かりました。)」書類作成に追われた上司に対しては、帰るときに「(本当に)お疲れ様でございました。」などと言えば良い。

【解説2】「御苦勞様」は、自分のために仕事をしてくれた人、例えば、配達をしてくれた店の人などに対してねぎらいの気持ちを込めて使う表現である。「ねぎらい」は、基本的に、上位者から下位者に向けたものとなる。

これに対し、「お疲れさま」は、一緒に仕事などをした後、お互いに声を掛け合うようなときに用いる表現である。そういう状況であれば、言葉の程度に気を付けさえすれば、だれに対しても使える表現である。したがって、仕事上の上司であっても同じ仕事をしていれば使うことができる。

ここで問題になるのが「ねぎらい」ということであろう。例えば、何かを教えてくれた人、しかも目上の人に対して、その行為をねぎらいとしてとらえられるのかという問題がある。教えを受けた関係ではそれに対してはねぎらいいの言葉ではなく、「ありがとうございました」などの感謝の気持ちを表す言い方に変えたほうがよいだろう。

一緒に書類作成に追われていた上司に対しても、「お疲れさまでした」と、気持ちを込めて使うことができるが、こうした定型的な表現ではなく、「今日はありがとうございました。仕事が少し分かるようになってきました。」などと別の観点に立った表現を使えば、その気持ちが相手に伝わると言えよう。

【27】 講演会の講師に対して、終了後の懇親会で会ったときに「すてきなネクタイですね」と褒めてもいいのだろうか。また、仕事を分かりやすく教えてくれた上司に対して、「課長は教え方が上手ですね」と言いたいのだが、どう表現すれば良いのだろうか。

【解説1】 基本的には、褒めたい気持ちを表明すること自体に問題があるわけではない。しかし、褒めるという感情を伝えるのにふさわしい相手や状況なのか、褒めるのにふさわしい事柄なのかは、考える必要がある。

例えば、講演会の講師に対して、講演会後の懇親会で、ネクタイを褒めることが適切かどうか、上司に対して、仕事を教えてくれたという状況で、教え方を褒めることが適切かどうか、よく考えなければならないだろう。前者では、講演の内容について、分かりやすかった、参考になった、というような点を中心に伝える、後者では、教え方の良しあしに触れるのではなく、教えてもらったこと自体に対する感謝の気持ちを伝える方が、より良いコミュニケーションが成立するのではないだろうか。

【解説2】 相手の身に付けるもの、持ち物、容姿などを褒めることができるのは、基本的には、同じ立場や、親しい関係の人同士であろう。したがって、特に目上の人や親しくない人を褒めると、なれなれしいと思われることもあるだろう。それほど親しくない関係であっても、講演会後の懇親会は半ば公的なものであり、そこで講師のネクタイを褒めることはやや不適切だと言えるのではないだろうか。

能力、技術などを褒めることができるのは、それが評価できる立場にあることを示すため、相手の専門的な能力、技術について、それをよく知らない立場で褒めることは、相手を不快にさせることがある。特に自分が習った立場であるなら、その立場から「分かりやすく教えていただいたので、よく分かりました。」などということ、相手を褒めたいという気持ちに替えることができるだろう。

【28】 部長から「いい仕事をしたね。」と褒められたので、思わず「とんでもございません。」と言ったのだが、この表現は使わないほうが良いとどこかで聞いたことを思い出した。「とんでもございません」の何が問題なのだろうか。

【解説】 「とんでもない」は本来このままで一つの形容詞であり、「とんでも」が「ない」わけではないので、「ない」を「ございません」に変えることはできない。これが、「この表現は使わない方が良い。」と言われる大きな理由である。したがって、この立場に立てば、「とんでもない」を丁寧にするためには、「とんでもないことでございます」あるいは「とんでものうございます」にすれば良い、ということになる。しかし、「とんでもございません」という言い方自体はかなり広まっており、しかも、「とんでもないことでございます」とは、表そうとする意味が異なることに留意する必要がある。ここでの例は、褒められたことに対して、謙遜して否定する場合の言い方である。自分を褒める相手の言葉を打ち消すために、「とんでもない」と言いたい、そのま

までは丁寧さが足りないと感じるので、どう表現すればよいのかと考えたのである。その際、「とんでもないことでございます」と言ったのでは、あなたの褒めたことは「とんでもないことだ」という表現になり、かなり強い否定になってしまう。「とんでもございません」は、あなたの言っていることがとんでもないことだ、と言いたいのではなく、相手の褒めを軽く打ち消したいということである。したがって、「とんでもございません」は、相手からの褒めや賞賛などを軽く打ち消すときの表現であり、例えば、あの人のしていることはとんでもないことだ、という場合に、「あの方のなさっていることはとんでもございません。」とは言わないのである。

#### 4 能力などを直接尋ねることの問題

【29】 英語に堪能な部長がフランス語もできるかどうかを尋ねたいのだが、「部長は、フランス語もお話しになれるんですか。」や「部長は、フランス語もお出来になるんですか。」と言うのは失礼なように思う。また、課長もコーヒーが飲みたいかどうかを尋ねたいとき、「お飲みになりたいですか。」は変な表現であるように感じる。「課長は、夏休みにはどこへいらっしゃるつもりですか。」も、敬語の間違ひはないと思うのだが、何だか変だ。これらの表現は何が問題なのだろうか。

【解説1】 ここでの例のように、「お話になれますか」、「お出来になりますか」、「お飲みになりたいですか」、「いらっしゃるつもりですか」などは、敬語の形自体に問題はないものの、上位者に対して問うには、内容的に違和感がある表現だと言えるだろう。それは、上位者に対して、その能力、意思、願望などについて直接的に尋ねるという点にある。

【解説2】 立場的に下位にいる者が上位にいる者に対して、何かの能力を直接的に問うことは、相手の力量を試すような趣旨に取られてしまう。また、何を好むか、何がしたいか、何をやるつもりか、などの気持ちを問うことは、その上位者に余りに近づき過ぎ、個人的な領域に踏み込むことになるので、好まれないと言えるだろう。なお、言い方や態度によっては、上位者が下位者に対しても同様のことが言える。

しかし、直接的な表現を避けることによって問い掛けることは可能である。例えば、「フランス語もお話になりますか。」と事実を問う形にする、「コーヒーをお飲みになりますか。」、あるいは、その意図がコーヒーを入れて供したいということであれば、「コーヒーいかがですか。」という表現で、十分にその意図を実現することができるだろう。また、意向を問う時に使う「つもり」は、ある特別なねらいを聞きただそうという語感を持った表現である。それを避けて、「どこへいらっしゃいますか。」と言う表現であれば、問題は生じないだろう。

## 5 依頼の仕方の問題

【30】 同僚に仕事を頼むときに、自分が責任者ではなかったが、「この仕事をしていただきます。」と言ったら、きつい言い方だと言われてしまった。敬語を使っているから良いと思っていたのだが、どう言えば良かったのだろうか。

【解説1】 自分が責任者でない場合には、「この仕事をしていただきます」のように自分が決定権を持っているような表現ではなく、「この仕事をしていただけますか」など相手が決定権を持ち得る依頼の形などで言えば良いだろう。ほかに、「これお願いできますか。」「お願いしてもいいですか。」など、相手に判断をゆだねるような表現を用いることで、同じ指示をしても印象が大きく変わると言えるだろう。

【解説2】 複数の人たちで仕事をしているとき、その仕事の方針や方向などを決めるのはだれか、ということは、丁寧さや配慮とも関係が深い。明らかに決定権を持っている人はそれを打ち出してよいのだが、その場合でも、自分が決めるから他の者は従えという態度を取るとは丁寧さを欠くことになる。決定権がある場合にも、すべてを自分が決めてしまうのではなく、相手や第三者の意思も尊重する、という姿勢を示した方が丁寧になる。

逆に決定権のない人が決定権を持っているように振舞うことには問題がある。例えば、「はい、次に進みましょう」と進行に関して発言できるのは、その会のリーダーや司会をしている人であるので、それらの人以外が言うと失礼になる。仕事以外でも、例えば「どうぞ、召し上がってください。」と勧めることができるのは、その食事を提供した側の人、招待した人なのであって、招待された客同士でそのような表現をすると妙なことになる。また、「この店にしましょう」と決められるのも、招待した側の人であって、招待される側が決めたのでは、丁寧さや配慮に欠ける。

要するに、その場では、だれが決定権を持っているのかを考え、それに添った言い方をすれば良いということである。なお、決定権を持つことができるのは、必ずしも常に上位者とは限らない。

【31】 同僚から突然「これ、お願いします。」と書類を置いていかれたとき、何だか失礼な頼み方だと感じた。何が問題だったのだろうか。

【解説】 これは、何の前置きもなく、突然頼むという点が、行動の点でも、言葉の点でも問題であったと言えよう。もちろん、いつも仕事を依頼し合っているような関係であれば、「これ、お願いします。」で十分な場合もあるだろう。しかし、何か頼むと言うことは、それが例え全体のための仕事であったとしても、自分の管轄の仕事をしてもらうわけで、相手には負担が掛かることだと考えられる。相手に負担が掛かることを頼んでいるのだ、という意識を持って、その意識を表明する方が、相手に対してより配慮した表現になる。

この場合は、「すみませんが」や「忙しいところ悪いけど」などの前置きの表現が

あるだけで、随分違ってくるだろう。

また、依頼することが当然であるかのように受け取られる「お願いします。」という言い切りの形より、「これお願いできますか。」「お願いしてもいいですか。」などの婉曲的な表現を使った方が相手に対する配慮を表すことができる。

【32】 「それ、取ってもらってもいいですか。」「こちらの書類に書いていただいてもよろしいでしょうか。」というような言い方をよく耳にする。「取ってもらえますか。」「書いていただけますか。」に比べると、何だか回りくどい言い方に聞こえてしまう。こうした表現については、どう考えれば良いのだろうか。

【解説1】 基本的に、「～でもいいですか」「～でもよろしいですか」などは、自分のすることについて、相手の許可を求める言い方である。しかし、「取ってもらってもいいですか。」という表現は、自分を取るのではなく、「取ってもらえますか。」という依頼の表現と同じ内容であり、「書いていただいてもよろしいでしょうか。」も「書いていただけますか。」という依頼の敬語表現と伝えたいことは同様だと言える。したがって、本来なら依頼表現で済むところを、許可を求める表現に変えているということになり、その分だけ、「回りくどい」印象を与えるのだと言える。

【解説2】 こうした、「依頼」を「許可を求める形」で行う表現はよく耳にする。なぜこのような回りくどい言い方をわざわざするのだろうか。

例えば、「書いてください。」「書いてもらえますか。」といった表現は、相手に直接働き掛けているものである。それに対して、「書いてもらってもいいですか。」という表現は、自分が書いてもらえるかどうかを尋ねる形に変わっているのである。そうすることで、相手に対して押し付けるような印象をなくし、相手への配慮を表そうとするのではないかと考えられる。これが、回りくどい、言い換えれば、婉曲的な表現をしようとする主たる理由であろう。

ただし、許可を求める表現の持つ丁寧さや配慮を表す点が生かされた表現なのだと考えることはできるだろう。

## 6 いわゆる「マニュアル敬語」の問題

【33】 レストランで働いているのだが、いつも「御注文の品はおそろいになりましたでしょうか。」と言いながら、何だか変な表現だと思う。なぜ変なのだろうか。どう言えば良いのだろうか。

【解説1】 「御注文の品はおそろいになりましたでしょうか。」という表現は、敬語が誤って使われている。「お～になる」というのは尊敬語であり、この表現では「御注文の品」を高めていることになってしまうからである。(→第2章)

【解説2】 マニュアル敬語は、言葉の上のサービスの質を、ある水準に保つために考えられており、それぞれの言葉に、どのような気持ちが込められているのかをよく考えて



作成されれば、その有効性が期待できる。ただし、それを真に生かすためには、大切な条件がある。使う側、また指導する側に、マニュアルという「型」をベースにしなが、顧客の顔や態度に気を配りつつ、絶えず表現について考え工夫を重ねる姿勢が必要だということである。マニュアル敬語の問題のほとんどは、この実践の欠如に起因する。

また、マニュアル敬語は、アルバイトの若者や、彼らが働くレストランやコンビニエンスストアなどだけに特有の問題では決してない。敬語の使い方には問題はなくとも、お客の顔を全く見ないまま接客を済ますなど、態度が言葉を裏切っている大人も、世の中にはたくさんいる。形だけの敬語では、敬意は伝わらない。相手の表情や動作ににじみ出た気持ちを察知する、相手の言葉にしっかり耳を傾ける、そしてその場面の意味と相手の気持ちを十分に踏まえた上で、敬意を言葉に乗せて示す。そのような姿勢の実践があつて初めて、マニュアルが生きるのであると、心すべきであろう。

## 7 敬語使用における地域差の問題

【34】 首都圏の大学に通う地方出身の大学生だが、先日、ゼミナールのコンパのことで、担当の先生に「先生も行かれますか」と尋ねたところ、ちょっと不快そうな顔をされた。何か言い方がまずかったのだろうか。

【解説1】 先生の反応から判断して、ここでは「行かれますか。」よりも「いらっしゃいますか。」がふさわしかったと思われる。「行かれますか。」も尊敬の表現として決して間違いではないが、首都圏における尊敬語としては「行かれる」よりも「いらっしゃる」の方が敬語の程度が高く、より一般的であるため、このように感じる人もいる。

【解説2】 同じ敬語であっても、その使用状況や意識については、様々な地域的な違いがある。「行かれる」で先生に対する十分な配慮が表せる地域もあれば、そうでない地域もある。地域の言葉には、それぞれに敬語の仕組みが備わっており、それを理解し尊重することが大切である。例えば、「読むか」という表現を上位者に言う場合に、どのような尊敬表現が最も多く使われているかを地域的に見ると、首都圏を除く東日本では「読みますか」、首都圏では「お読みになりますか」、西日本では「読まれますか」、というように異なることが分かっている。(文化庁「国語に関する世論調査」による。)

【35】 関西に行くと、「どこから来たのか」という意味で、「どちらから来はったんですか」と聞かれることがある。この「来はった」にはどんな意味が込められているのだろうか。

【解説】 各地の方言には、全国共通語の敬語にはない、特有の敬語(方言敬語)がある。この「はる」を付けることによって、話し手は相手とのほどよい距離感を作ることができる。すなわち当地の人にとっては、「どちらからいらっしゃったんですか。」という表現ほど改まりもせず、かといって「どこから来たん(=どこから来たの)。」ほど

くだけ過ぎてもいけない、適度な親近感を持ちながら、相手を立てる表現と見なされているのである。なお、「～はる」は、尊敬語の性質を持ちつつも、「お父さんはいては  
りません。」のように身内に対しても使われることがある。

<以下は、現時点では、ほとんど検討されていないものである。>

## 終わりに

第1章から第3章を通じて、敬語に関して述べてきたが、最後に、敬語の将来について考えておきたい。

現在のように社会の変化が激しい時代には、言葉も大きく変化してくる。敬語は昔に比べるとその形も使い方も変わりつつある。

しかし、現代の社会の動きに合わせた使い方に変化していると考えれば、同じ形のままではないにしても、敬語がこれからも使われ続けると言えるだろう。したがって、敬語を含んだ言葉遣いとしての敬意表現がなくなることは考えられない。コミュニケーションを円滑にするために、また、自分自身をどう表現していくかということのためにも、自分自身の言葉遣いを磨くことは今後も必要なことである。